異世界の方、いらっしゃい！

砂上 建

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界の方、いらっしゃい！

【Ｎコード】

Ｎ４９４６Ｚ

【作者名】

砂上　建

【あらすじ】

異世界への憧れというものは誰もが持っていたものだ。しかし成長していくと誰もが失ってしまうものでもある。多くの人が異世界というものの存在を気にしなくなったある頃、様々な要因が重なり、異世界の存在を捉えることに成功した。それから時が流れ、街中で普通に異世界人が歩くようになったこの世界で、ある少年に不思議な縁が寄り集まる。

これは、少年？遠原櫟（とおはらくぬぎ）の個人的な問題の物語である

※そういった描写も今後入る予定なので残虐描写ありにしています

雨、降り注ぐ（前書き）

警告とお願い：ファンタジーと銘打ってはいますが、ほとんど現代物です。剣と魔法の世界を期待していた方は申し訳ありません。どうかご了承ください。また、誤字?脱字があればどうか教えてください。

雨、降り注ぐ

この世界には昔、「異世界」というものへの憧れを持つ人間がたくさんいた。ただ生きているだけのように感じられてつまらない現実は、太陽と月が周ってさえいれば日々なんて勝手に進んでいく。そこに自分がいるかどうかはどうでもいい――――そう思った人間は多く居た。

そして流行ったのがいわゆる「異世界もの」。異世界の住人たちが繰り広げる物語であったり、もしくはそこに現実世界の住人がいったりする話だ。それは現実に退屈する人たちの心に強い衝撃を与えた。なかには「自分もいつかそんな世界へ行ってみたい」と思うような人も出てくるほどだ。そうしてみな同じような時期に夢から覚めて、現実と正面から向き合い始める。「ああ、そういったことにあこがれていた時期もあった」、と。

その人たちから子供が生まれ、また同じように現実をつまらないものとして見て、異世界へあこがれる。そしてまた、夢から覚める。そんなことが何度もくり返された。物語というものはくり返されるうち劣化していく。異世界を主題にした作品は溢れるほど生まれてしまい、一昔前には子供にまで飽きられるようになってしまっていた。

そうしていつか世界が「異世界」というものに対して何も感情を抱かなくなっていたある時。ある事件が起こった。その年の一年前に行方不明となっていた一人の高校生の少年が、ひょっこりと家に帰ってきたのだ。

アニメやゲームでしか見たことのないようなファンタジックな服

装の男女を引き連れて。

当然、その少年の両親はその人たちを疑った。何しろその頃にはすでに剣を持って闊歩するような時代錯誤の日本人は居ないし、外国でも当然そんな危険人物はいない。いたとしてもコスプレイヤーだろうが、1年間行方不明だった少年にコスプレ姿でついてくるような空気の読めないやつは恐らくどこにも居まい。両親が少年に、この人たちはどこの誰なのか、ということを尋ねると、少年は聞いたことのない国名を言った。両親が首をかしげると、少年は「自分は異世界に行っていて、ちょっとそこで冒険をしていた」などと言った。この男女はその時の仲間だという。それを聞いた両親は最初信じていなかったが、少年はさらに信じられないようなことをした。

少年の手のひらの上に赤い小さな火の玉が浮かぶ。そしてポンッと小さく破裂。それは少年が異世界で覚えた魔術の一つであった。それを見た両親はその場で卒倒してしまったが、その後少年とその仲間たちが介抱し、事の説明に一晩かけてようやく両親には信用された。

一方世間では最初は子供の悪ふざけか何かと言われていたが、少年や仲間に話を聞いていた研究者たちが、数年の研究で異世界というものの存在を捉えることに成功すると、世界中が驚愕した。今まで創作の中でしかないと思われていた異世界の存在が、現実に初めて確認されたのだ。昔、異世界を夢見た者も、当時の若者たちも、みな心踊らせていた。そうして発見された異世界へと渡るため、少年の仲間の協力により、世界を渡るために魔術を使われた初めての機械、ポーターが産まれた。世界で決められた外交のための親善大使と、ポーターの安定のために少年の仲間の一人がその世界へと向かった。数日後、彼らが帰還したときに連れてきた魔女？ベアトリス。彼女の力により、我々はより多くの世界があることを知ったの

であった――――

大城(おおき)書店『新現代史』序文より

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

「あのさ…古賀(こが)先生」

「ん？どうした、遠原(とおはら)？」

６月の下旬ごろ、ある高校の教室でオレ、遠原櫟(くぬぎ)は、一人の男性教師と一緒にいた。個人授業、というわけではない。ただ中間テストに失敗して補習と相成ってしまったのだ。教師の名前は古賀近実(このみ)。クラスの担任であり、世界史の授業を担当している。見た目が中年のオッサンなため、このみというカワイらしい名前が台無しとはもっぱらの話だ。

「先生……ちょっと語り口調なのがやけにイラつくから、黙っててくれませんか……？」

イラつくが相手は教師なので一応敬語だ。基本この中年に敬語を使うやつはいないが、望まぬ補習なんていう状況では、相手の機嫌を損ねるのはよくない。

「なんだ遠原、こっちのほうが好奇心やワクワク感が溢れてくるだろう？」

「いえ、むしろツッコミたい衝動に駆られました。なんで壮大な物語の序章みたいな語りなんですか」

「いや、壮大だぞ。具体的にいうと、ここから１５０ページは続く」
「それは教科書の話でしょう！？　というか、俺の補習科目は数学です！」
　この中年は自分の担当すら覚えてないのかとちょっと不安になる。数学の担当は確か青海（おうみ）という、去年入ってきた背の小さい可憐な女性の先生なのだが……
「しょうがないだろ。青海ちゃんが急用らしいんだから」
「だからって古賀先生が来ることはないでしょう。さっき語ってたのも世界史じゃなくて「新現代史」の内容ですし」
　新現代史とは、この世界が異世界の存在を知ってからの歴史のことだ。まだそんな頃からは７０年近くしか経っていないが、その頃から科学などの新たな発見が山のように見つかり、異世界の人間とのちょっとした交流なども増え、歴史の勉強としてはうってつけのものとなった。そのころからの歴史を新現代史、それ以前を日本史・世界史として扱っている。それはそれとして何でこんなめんどくさがりに見える中年教師が数学の補習にやってくるのか…と思っていると、加賀がやれやれ、というような表情をした。
「青海ちゃんはいねえけどよ、ここにいる可愛い近実ちゃんでまぁ、我慢してくれや」
「すみません先生、気持ち悪いのでトイレで吐いてきます」
　吐かないと体内から腐りそうなので、とは言わないでおこう。中年にはやさしく。しかし教師には厳しく。
「待て。……俺も行かせてくれ。あんなことをいうのはやっぱりやめておいたほうがよかったな……すまん」
「自分で言っておいて何いってるんですか。許してくれるんなら、もう今日は帰ってもいいですよね？　というか、帰らしてください」
　外は生憎（あいにく）……というか、梅雨なので当然のように雨が降っている。しかも、朝のニュースにでてきた気象予報士からも「満タンのバケツをひっくり返したかのような雨」というお墨付きももらっているほどの土砂降りだ。クラスメイトたちが帰っていった時はまだ普通

だったが、2時間ほど補習を続けている今は……もう、圧倒的に違う。雨が窓を叩く音がしきりに教室や廊下から響いてくるってのがおかしい。これ以上強くなられでもしたら、傘も保(も)たないんじゃないか？

「いや、ダメだ。こっちだって頼まれたからには最後までやってやらないとな……」

「えー、そりゃないでしょう。これ以上雨がひどくなったら傘があっても濡れるかもしれないじゃないですか」

「そりゃあ、こっちだってさっさと終わらせて帰りた――――」

「……あ」

――――――今気づいた。これ、別に長々と続ける必要はないんじゃないか？　担当の教師はいないし、そもそも何か課題が出されてるわけでもない……多分忘れたんだろうな……そうなるとここにいる意味が特に無いうえに二人とも帰りたい……そのことに加賀も気づいたようで一瞬アホみたいな表情になったが、そこは自称「可愛い」近実(このみ)ちゃん。この場をどうすればいいかすぐに気づいたようだ。

「しょうがねえから今日はもう帰れ。日を改めて青海ちゃんの都合がいい日にな」

完全な棒読み、ありがとうございます。この時点でうまくごまかせるかな、という不安な気持ちは吹っ飛んだのでオレもちゃんと返そう。

「え、本当ですか、ありがとうございます」

一瞬、加賀が「お前、そこはもうちょっとがんばれよ……」みたいな目を向けてきたが、あんたが言うな。気をつけてなー、という声を背中に軽い足取りで傘とかばんを手に取って、教室を出る。

雨のせいか雲のせいか、外は少し暗かった。

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

私立深根（みね）魔術高等学校。それがこの学校の名前だ。今はこの魔術学校というのは各地にある。どうやら魔女ベアトリスがこの世界にやってきて始めた事の一つに、魔術の教育というものがあるらしい。異世界との接触（せっしょく）にはどうしても機械以上に魔術の力が必要、ということらしく、魔術を扱える人間を増やすために始まった世界規模のプロジェクトだ。ただ最初は教える事のできる人の数も限られており、少人数のエリート教育だったが、今ではそういった事はなく、こうして普通に私立でも建てることが出来るようになっている。国立でもエリート主義でもなんでもないので、俺のような奴も通えるような気軽さだ。普通の学校としてもそれなりのレベルであるから、ここを希望する学生も多いという。女子の制服も目立ったりするようなところや、派手なところはない（とはいっても魔術学校の制服と普通の高校の制服は見た目からして違うが）が、着る者の可愛らしさを十二分に引き出せるためそのためだけに、入学を狙う娘（こ）もいるほどだ。入学はせずに制服だけ買おう、という人のために、制服自体は誰にでも売ってくれるらしい。一応うちにも2着ほどはある……家族のだが。

　そしてベアトリスがやってきてから変わった事と言えばもう一つ、街並みが少々おかしくなった、というか、コスプレみたいなのが増えた。間違えてはいけないが、異世界からの来訪者達や、自分の世界から転移してきたやつらだ。コスプレイヤーと間違えるととてつもなく怒るので要注意。どうもこの世界は様々な世界の集まりの中でも中心の方に位置するらしく、色んな世界から人が流れてくることがあるらしい。異世界の人間を元の世界に帰すことは、本人が希望すれば行われる。しかし帰すのは簡単らしいが、こちらの世界の人間が異世界へ行くのは結構難しいようだ。ベアトリスと遭遇して

帰ってこられた親善大使たちは結構運がよかった、ということだろう。

異世界の話ついでにあと一つ、実は世界自体は色々と分かれているが、そこに住む人々はほぼどの世界も同じと言われている。平行世界、というやつだ。たとえばさっき出た少年の仲間だった男女はこの世界ではイギリスのカップルだったらしく、テレビに映ったファンタジーな衣装を身にまとった自分たちを見て「見ろよ俺たちすげぇ格好してるぜＨＡＨＡＨＡ！！」などと言いながらイチャイチャしてたそうだ。爆発してしまえ。ただ、どこの世界も同じ人間しかいない、というわけではなく「元の世界では生きているけど、別の世界では死んでいた（逆も可）」「自分の世界では過去に生まれていた人間ｏｒ未来に生まれるはずの人間が別の世界では今生きている」なんていうこともあるらしい。

時代を遡（さかのぼ）れば刀を持っていた侍が歩いていた、ということがあったが、今ではプレートアーマーを身につけ、大剣（たいけん）を背負う人間も珍しくはない。同じ顔の人間は3人いる、という言葉も今となっては3人どころではなく、死語になって久しい。異世界の存在が珍しいだの、新鮮だのといった気持ちも最近では、今さらという感じがする。もはや今の時代は基本的に異世界すらも当然の存在として見られている。例外もあるにはあるが。

「（別にドライだとは思ったりしないが……あれだけ盛り上がったっていうわりには、一気に冷めたような気がするな……）」

初夏だというのに、雨のせいで外の空気は冷たく、雨独特の臭いがする。少し嫌な気分で帰る途中、商店街を抜けようとすると、場違いに思えるような黒いリムジンが横を通った。なんとなく見てみるとスモークを張っていなかったので中に乗っている人が見えた。

確かこの前、道のど真ん中にいきなり剣を持って現れて、姫がどうだのと叫んでいた騎士だったか。その時とおなじ鎧(よろい)を着て車に乗せられていた。

「（鎧を着て車に乗っていた……となるとやっぱり、元の世界に帰るんだろうな……）」

あの時来た騎士の顔と剣には血がこびりついていた。そして、姫がどこにいるかとか聞いてきたりしたらしい――――多分彼はここに来るまでに戦っていた。恐らく、『姫』という人物を探し、あるいは救い出すために。そんな大事な戦いから一気に別世界へと飛ばされた彼の気持ちを、悔しいのだろうな、としか自分では測ることはできなかった。

さらに進んでいると、真っ赤な髪の毛の男がエプロンをつけて野菜を売っていた。その髪の色に買い物に来たおばちゃんは怯え気味だったが、男の紳士的にしようとして失敗しているが、裏表はなさそうな態度にとりあえず、落ち着いているようだ。

あの男も確か先ほどの騎士のように、この世界に突然やってきた人間だったはずだ。そんな彼が今もこの場にいるのは、この世界にいることをよしと思ったのだろう。帰ることも可能だが、こうしてこの地に残ることも可能だ。その場合、保護責任者が必要となるが、それはこの世界の一般市民なら誰だっていい。彼の場合は八百屋(やおや)の主人だろう。歩きながら見ていると、男がおばちゃんに傘をあげている。それをもらったおばちゃんが顔を赤らめ……ちっ、ただのフラグ乱立主人公野郎か。爆散しろ。

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

商店街を抜け、家の近くの道へとたどり着く。傘ももうほとんど意味がないなぁ、などと思っていると、道の向こうから走ってくる一人の少女が視界に入る。

その瞬間、心のうちにドス黒い感情が芽生え、それが一気に身体中へと伝わっていくのを感じた。

頭が、彼女の存在を認識しようとする。足が、彼女の元へと駆けていこうとする。……手が、彼女を捕まえようとする。いったい何がどうなっているんだ？　という思考をはさむ暇もない。ただ、必死で黒い感情を抑えようとした。

傘を手から離し、「満タンのバケツを思いっきりひっくり返したような水」を一気に身体に浴びる。よく言うだろう？　目を覚ませるのには顔を洗うのが一番いいって。もっとも目がスッキリする。こんな寒い状況だと、雨水もわりと暖かいような気がするな、などと考えられるようになったあたりで、黒い感情は溶けるように消えていった。

「（いったいなんだったんだ……？　あんなふうに憎々しい相手なんていなかったと思うが……）」

考えても仕方ないか、と思考を中断する、というかこれ以上は濡れたくない。濡れた服の洗濯も楽ではないのだ。もう意味があるのかわからないが無いよりマシなので傘をとって、さっさと家に帰ろう……そう考えていると、目の前に、おそらく先ほど向こうから走ってきたであろう少女が息を切らしていた。どこの学校かはわからないが、制服を着ているという事は、学生だろう。なぜか傘を差していない少女の顔を見てみると———少女は涙を浮かべていた。雨水と涙でどちらかもわからないほどに顔が濡れているが、嗚咽（おえつ）が混

ざり、手で目元を拭う仕草は泣いているようにしか見えなかった。

「遠原……さん」

———オレを、知っている？　本当に誰だ？　こんな子を、オレは知らない。頭の中で知り合いにこんな人はいただろうか、と必死に思い出そうとするが出てこない。その内、彼女が俺に抱きついてきた。

「遠原さん……お願いです。私を———助けてください……」

頭の中に、結局彼女らしき人物が出てくることはなかった。

雨降って、自乾かす

「た、ただいまー……」

家についてすぐ、できる限り小さな声で、あいつが先に帰っているかどうかを確認する。今の状況においてあいつはいない方が都合がいい。玄関に靴があるか見てみると……あ、ヤバい、居る。しかし今のウィスパーボイスが、聞こえているとは考え難い。今から一気に二階の自室まで行き、服を素早く着替え、居間に行けば、当然帰ってきていたのかと聞かれるだろう。そこで「一応居るかは確認したんだけどなぁ」と言っておけば、この場は多分乗り切る事ができる。

———よし、それじゃあミッションスタ

「遅かったですね、兄さん」

き、決めようとしたのに……

奥の部屋から目の前にやってきたのは、遠原樫羽。少し長い後ろ髪を、一本の極太な髪の毛のように縛っており、眉の辺りの高さで綺麗に切りそろえられた前髪の下から見える目は、普段から針のように鋭い。雨で濡れ濡れな俺を見る今の樫羽の目つきは、……針山と言われてもいいぐらいに鋭さを増している。今にも刺されそうだ。しっかり者な樫羽は、こういったことにとても怒りやすい。俺が傘を持って行っているのも知っているので、なんで傘を持っていったはずなのに頭からつま先までこうも濡れているのか、と疑っているんだろう。正直に「わざとやりました。てへっ☆」とか言ったら多分、説教コースになるだろうなぁ……

「……兄さん。なぜ傘を持っていきながら、そんなにもずぶ濡れなのですか？」

樫羽のとてつもなく落ち着いた、もしくは冷めた口調が、濡れた体をさらに寒くさせる。ああ……これ、もしかしたらすごく怒ってるかもしれない。今日は元々、早めに帰ると言っておきながら普段より2時間は帰るのが遅れてるし、夕食の準備だって未だに済ませてない。一応、昨日の内に下準備は済ませてあるが、今の樫羽の料理スキルでは恐らく、うまく出来ないはず。空腹は人をイラつかせるからな……きっとそういうことなんだろう。

とにかくこのまま黙っていても、より立場が悪くなるだけだ。『この後』の事を考えると今の樫羽を怒らせたままというのは非常に悪い。

「……いやな、樫羽。日本男児ってのは、傘なんて差さずに雨の中を突っ走るのがもっともかっこいいと言われていてだな……」

「その、濡れたネズミみたいな格好のどこがかっこいいんですか？　私にはわかりませんね」

「ふっ……違うぞ樫羽。見た目ではない、その魂こそが」

「そんなことはどうでもいいですから早くシャワーでも浴びてきてくれませんか？玄関にずっと立たれていても、靴が濡れるだけなので」

そう言って樫羽は居間へと戻ろうとする。が、どんなに冷たくされてもこっちにも言わなくてはいけない事がある。オレは樫羽を呼び止めた。

「待ってくれ、樫羽……ちょっと、人を紹介しなきゃいけないんだ」

「人？　いったい誰です？　確か兄さんの知り合いの方とはほとんど会ったことがあると」

「あ、あの……お邪魔します……」

申し訳なさそうに俺の後ろから、先ほど道で出会った少女が入ってくる。オレと同じもう一匹の濡れネズミを見た樫羽は――――

―呆然としていた

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

「遠原さん……お願いです。私を―――助けてください……」
土砂降りの雨が降り続ける道の真ん中で、オレは一人の少女に助けを求められた。いったいこの娘(こ)は？　どうしてオレの名前を？　考えることは多くあったが、頭が回らない。どうしようかと考えようとしていると、

「「―――――――っくしゅん」」

目の前の女の子とほぼ同時にくしゃみが出た。

「……」

「……」

……とても気まずい。雨を浴び続けていたんだから、身体(からだ)が冷え切ってしまっていてもおかしくはないだろう……。それはそれとして、オレはまだいいが、女の子が体を冷やしてしまうのは良いことではない。

「あー……あのさ……」

「は、はい……なんですか……？」

彼女が顔を上げてこちらを見上げる―――よく見れば、この娘、相当な美少女だ。雨で髪が潰れてしまっているが、首にかからないぐらいの薄い茶色のショートヘアであることは分かった。泣き顔も綺麗(きれい)だったな、と思ってしまったが泣いている顔なんて、そう見ていて気持ちのよいものではない。

「とりあえず、ちょっと付いてきて。そこでタオルと……よかった

ら、シャワーとかも貸すから」
「え？　い、いえ、あの……それは……ちょっと……」
「ちょっと待った、君、多分勘違いしてる。確かに家に行くけど、ちゃんと妹もいるから。頬に手を当てて顔を赤らめたりする必要ないからね？」
　いきなり顔を赤くしてポッ、となったので一瞬焦りそうになったが、この雨の中だとすぐに頭が冷える。おかげですぐに理由がわかった。出会って早々家に誘って、いきなりシャワーを浴びさせるナンパがこの世にあるわけないだろう……
「……妹、ですか？」
「……うん、まぁ、妹。だから君が顔を赤くするような事態は――――へくちっ！　……とにかく一度、身体を暖めよう。じゃないと二人とも風邪ひくと思うから……」
　さっきはこんなに寒いと雨水も暖かい、なんて思ったが、今はもう無理だ。そんなこと言える元気なんて無い。頭からお湯を被りたい。傘は当然、女の子のほうに持たせることにする。二人ともすでに思いっきり濡れてしまった後だから効果なんてあるんだかわからないけれど、女の子を濡らして帰るなんて……やだ、なんかこの言葉ちょっとエロい……
「それじゃいこう……できるだけ、早く。話もそこで聞くからさ」
「……妹……妹……？」
　……なんだかボーっとしてるな。よく聞こえないけど何か言っているみたいだから意識はあるんだろうけど……しょうがない、手でも引いていこう。
「うーん……いたかなぁ……そんな人……」
　手を引いていく途中も何か言っていたみたいだけど、雨音でよく聞こえなかった。

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

――――――ここに彼女を連れてくることになった理由をある程度かいつまんで樫羽に聞かせる。が、なんだか反応が薄いというか……反応していないような……。試しに目の前で手を上下に動かしたり、頬を引っ張ったりしてみるが反応がない。あー……いつもの『あれ』か……

「うん、問題なさそうだ。ちょっとタオル取ってくるから待ってて」

「え？　あの……妹、さん……は……？」

「大丈夫。こいつは時折こういうことがあるんだ。特に悪いことをするわけじゃないから無視していいと思うよ」

「は、はぁ……」

　バスルームのほうへ行き、二人分のタオルを取ってくる。廊下に水が垂れるのは嫌だが、その辺はあとで雑巾で拭いておけばいい。持ってきたタオルを少女に渡して、オレも服を脱がずに拭ける部分を拭いておく。

「あ、ありがとうございます。それでお願いしたいのは――」

「いや、その前にシャワー浴びてくれれば？　体も冷えてるだろうし」

「い、いえ、着替えがないので……シャワーはちょっと……」

「あ、そうか……でも樫羽の服を、って意識が飛んでるんだった……」

　うーむ……よく考えるとこの娘は１５歳の樫羽よりも年上のように見える。サイズが合うかどうかも心配だ。かといって家にはあとはオレしかいないが……少女に貸せるものといえば大き目のＹシャツとトランクスぐらいしかないけれど……だめだな。イメージしてみたがオレの趣味じゃないし、樫羽が目を覚ましたらなんて言うか。となるとここはこうするしかないな。

「名案を思いついた。ちょっとここで待ってて。君が着れるような服を取ってくるから。ちゃんと、女物をね」

「え？　妹さんが気を失ってますけど……あ、もしかしてお母さまの？」
「いや、樫羽の服」
ダッシュで階段を上り、樫羽の部屋のドアを力強く開ける。思春期だからか、１３歳ぐらいになったと同時に「兄さんは入っては駄目ですよ？」なんて言われてからこれまで入ることはなかったが、今、再びこの部屋へと入ることにした。…ふむ、散らかってないし、壁にアイドルのポスターを貼ってたりもしないし、友達が来たような跡もない。が、今それはどうでもいい。問題は彼女に着せる服だ！
部屋全体を見回すと、目的の衣服なんかが入っているであろうタンスを発見。それに近づき、手を伸ばす。

さて、人が入浴、もしくはシャワーを浴びた場合に必要なのは、当然着替えだ。普段ならその前に着ていた服を着てもいいし、今回のように服が濡れていたりする場合は服も替えを用意しなければいけないが、どちらにしろ、替えなければいけないものがある。
――――そう、下着だ。それは現代人なら誰だって替える。万が一、普段は替えないといっても、現在のあの雨の中をずっと傘も差さずに走っていたなら、確実に下着も濡れているはずだ……これもちょっとやらしいな。だが、だからこそ、彼女には服だけではなく下着を、必ず下着を持っていかなくてはいけない。こんな空気が冷えきった日に、上下で着けないなんて事は絶対にダメだ。ほら、よく女性は冷え性だって言うしね！だからこれはちょっとした紳士的な親切なのだ。きっと樫羽だって許してくれる。現在の樫羽のスリーサイズを推測するための材料をさがしても、言わなければ樫羽は許してくれる。オレは、樫羽を信じよう。
「樫羽……これはきっと人のためになる。だから何も言わず」
――――――――タンスを空けようとした瞬間、わき腹に槍のように鋭く、鉄球のように重いドロップキックが炸裂した。倒れながらも、意識が飛びそうになるのを必死で抑えていると、首根っこを掴まれ

て、部屋の外に放り出された。樫羽め……復活したか。しばらく廊下でボロ雑巾のようになってうずくまっていると、部屋の中から両手で服やらを抱えた樫羽が出てきて、俺を見るなり、
「おや、ゴミクズ兄さんではありませんか。居間で正座でもしていて待っていてください……すぐに行きますから」
そういって下の階へと降りていってしまった。……どうやらオレはボロ雑巾ではなくゴミクズだったらしい。

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

その後、居間に行ったらすでに待ちかまえていた樫羽から、遅い、と言われてアイアンクローをもらい、正座で30分ほど説教をされていると、連れてきた少女からシャワーから上がったことを教えてもらい、樫羽から逃げるようにシャワーを浴びに行った。
で、25分ほどたってシャワーを上がり、居間に行ってみれば……1時間近く前自分に助けを求めた時とは真逆な、敵を見るような目で少女がこっちを見ていた。さては樫羽め、さっきのあれの事を教えたな……？
「……遠原さん、最低（さいてー）です」
「ああ、最低野郎のクズ兄さん。ゴミは洗い流せましたか？」
二人のこちらを見る目が、とても冷たい。少女のほうは樫羽と比べて、ショートヘアから出てくる、かわいい女の子らしさから冷たい視線も弱く感じるが、樫羽のそれと合わせると、さっきまで熱いお湯を被っていたのに恐ろしさで冷や汗が出そうだ。
「……いや、さっきは本当にすみませんでした。どうか許してください」
「……ふむ。まずは夕食を作ってからですね。その後なら話を聞いてあげます……あなたも、それでいいですね？」

樫羽からの提案に少女は不本意そうだったが、まぁいいです、と頷いてくれた。
「寛大な処置をありがとう。それじゃあ急いで作ります……はい」
それにしても、随分と優しい提案で助かった。いつだったかの時みたいに1ヶ月の間、樫羽の身の回りの世話をするみたいなのじゃなくて本当によかった……さっさと準備に取りかかろう。もう午後七時をまわっている。樫羽が空腹でキレたりする前に急いで作るか……

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

「「いただきます」」
「い、いただきます…」
午後八時、普段より遅いが、夕食が完成した。少し煮込む時間が足りなかったが、クリームシチューだ。まずは樫羽が一口、上品そうに食べる。
「……よいですね。合格点です。」
「そりゃ、必死で作ったからな。でもそんな肩肘張らずに、気楽に食ってもいいんじゃないか？」
「いえ、いつもこういう食べ方なので……むしろ兄さんの食べ方がみっともないと思いますが。ご飯ではないのですよ？」
「左手で皿を持ちながら食べても良いのが家庭料理だ。それが駄目ならどこかレストランで食ってこい」
家でまでそんなマナーを気にしてもストレスにしかならないだろう、と言ってやりたいが説教くさいから止めておく。自由に食べさせるのが一番だ。
「わざわざどこかの店に行かずとも、兄さんの料理なら充分満足できますよ」
「……へいへい、お褒めの言葉、ありがたく頂戴しますよ」

樫羽がこちらに笑いかけてくる。笑ってるときは本当に無害なんだよなぁ……。しかし、褒められたのは嬉しい。もう一人にも聞いてみるか。

「君は……ど……う……？」

……なんか凄くがっついてる。この娘、多分おしとやかな方だと思うんだが……それとも食事のときだけこういう感じだったりするのか？

「……あ、はい、とっても美味しいです！　何か特別なこととかしてるんですか！？」

「いや、特にはしてないけど。というか……よく食べるね」

「……あ」

さっきまでとても勢いよく喰らいついていたのに、いま気づいたようだ。顔を赤くして恥ずかしがっている。聞けば、食事を摂るのが1日ぶりとのこと。それなら恥ずかしがることはないと思うが、彼女にとってはどうでもよくないらしい。自分の醜態（しゅうたい）を思い出してどんどん顔が紅くなる。かわいいなぁ。

「す、すみません。家に上がらせてもらった上にシャワーと夕食まで……」

「頭を下げることはありませんよ。時間も時間ですし、兄さんを頼ってきたのに何もしないまま帰すわけにはいきませんから」

「そうだな。謝ることじゃないと思う。頼るっていっても、結局まだなんのことかは聞いてないけど。ねえ……」

……あれ？　そういえば……

「？　……なんですか？？」

「……そういえばさ。まだ名前聞いてなかったよね？」

「…兄さん。普通は最初に聞くと思いますが？」

「いや、ちょっと間が奇跡的に外れて……そういうことだから、ダメな人を見る目をしないでくれ……」

誰だってシリアスなところでくしゃみが出たら調子は狂うだろうと思うんだ。これには少女も苦笑いをしていた。

「そういえば、そうでしたね。本来なら最初に名乗っておくべきだったのに、申しわけありません」
「いや、それは謝……った方がいいかな。礼儀としてはダメなわけだし。それで名前は？」
「はい。私は天木鹿枝（あまぎかえ）といいます」
やはり自分が会ったことのある人かどうか、確かめようとしてみたが、会うどころか聞いた事もなかった名前だった。
「天木さん……か。それじゃあ天木さん。何をオレに」
「兄さん。まずは夕食を食べませんか？　食事の場で話すような内容ではなさそうですし、それにシチューが冷めてしまいますよ」
樫羽がオレの言葉を遮（さえぎ）るように言った。確かに食事時に事情を聞くのはよくなかった。警察が尋問（じんもん）をするわけではないのだし、やめておこう。シチューも見れば、湯気が少し薄くなってきてしまっている。
「……それもそうだ。じゃあ、話はこれを食べた後で」
「はい、わかりました」
今は食べることを優先したいのか、天木さんは素直に頷いてくれた。……この娘のことだし、言っておいた方が良いだろうなぁ。
「……言わないとやらなさそうだけど、おかわりはしてもいいからね？」
「は、はい……わかりました……」
礼儀正しいのはいいんだけどなぁ……打ち解けられるといいんだけど……
この日、シチューの入った鍋の中身はものの見事に空（から）になった。

雨の日の終わり（前）

夕食の後、樫羽（かしわ）は宿題があると言って自分の部屋へと上がって行った。普段と何一つ変わらない自然な態度でそういっていたが、自分がいると天木（あまぎ）さんがオレに相談し辛いだろうから、と気を回してくれたんだろう。けれど食器を洗うのを手伝うぐらいはしてほしかったが……さきほどのあれのことで負い目があるので、少々頼みづらかったのでやめた。

天木さんには居間の方で待ってもらっている。お客さんなのに、手伝いますなんて言い出しそうだったからその辺に転がっていた新聞を読ませているのだが……失敗だったかもしれない。すごい集中して読みこんでいるみたいで、周りに人なんていないような空気が出ている。おかげで特に話したりすることもなくただ黙々と作業が続く。今この部屋では食器を洗う音と、たまに聞こえる新聞をめくる音しか聞こえないのが「話すことなど何もない」というような風に見えて、とてもきまずい。せめてこれが「私たちの関係に言葉はいらないわ！」というような感じだったら大歓迎なんだが……

……しょうがない、こっちから話しかけてみよう。まずは、この重苦しい空気からの脱出が先決だ！

「ねぇ天木さん。それ、面白い？」

「……はい、とても参考になります」

よかった、答えてはくれるみたいだ。これで何も返ってこなかったら嫌われてるのかと疑うところだった。

「へぇ、そうなんだ。よかったね！」

「はい。……」

「……」

なんか返して！　天木さんお願いもっと言葉のコミュニケーショ

ンとって！　洗い物してるのに、手じゃなくて心があかぎれしちゃう！

「……樫羽さんって、いい妹さんですね。遠原さんと血がつながっているとは思えません」

頭の中で悶えていると天木さんから助け舟のように話題が出された。しかし、その話か……ちょっと気乗りしない。

「まぁ、樫羽のことは長年ちゃんとしつけてきたからね。父さんも母さんもそういった事はしようとしなかったみたいだし……大変だったよ」

多分、当たり障りのないであろう答えを返す。だけど思い返すと本当に大変な日々だった気がする。２年前までのあのころを思い出すと、一日一日の軽い、本当に激流のような毎日だった。

「……でも遠原さんはちゃんとしたしつけをされているようには見えませんね」

「…それちょっとひどくない？」

ふふ、と天木さんが軽く笑っている声が聞こえる。冗談だったのかな？

それにしても樫羽が部屋に行ってからなんだか緊張している感じがなくなったように思える。いいことだとは思うんだが、もしや樫羽に何か原因があったりするのだろうか？後でちょっと聞いてみるか。

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

食器洗いを終え、ようやく天木さんから話を聞いてあげられそうになった。天木さんの向かいのイスに座り、息を落ち着けるために深呼吸をする。

「それじゃあ、天木さん。ちょっと遅れちゃったけど、どういった事情か……聞いてもいいかな？」
「……はい」
天木さんも一度、頭の中を落ち着かせるためにしばし無言になる。やがて、どう説明をすればいいのかがまとまったのか、天木さんが口を開いた。

「遠原さん……今、私は――――追われているんです……ある男の人に……」
「……」
天木さんの表情が、曇る。しかしその表情の重さとは裏腹に、言葉が次々とそれまでどこかに溜められていたかのように一気に天木さんの口から出てきた。
「……私はそれまで、あの人からそんなことを考えられないほど仲良くしてきたんです。まだ歳を片手で数えられるようなころから……ずっと。ずっと、ずっと一緒にいたんです。あの人がどんなにも優しい人か知っていたし、ケンカをするようなことも無かったんです。それなのに、最後に見たときの彼は何かを見失ったように私にナイフを向けて……あの日は、久しぶりにあの人に会えると思って楽しみにしていたのに…！」
「最初は何かの間違いか、冗談のつもりかと思ってたんです……！
でもあの人は何も言わず、私にいきなり切りつけてきました。そこから先はただただ、彼のことを恐ろしいものとしてしか見ることが出来ないんです……！　逃げて、逃げて、逃げて……そしてその度に彼は追いかけてきて！！　自分がここにいることを教えるように私が逃げる先に……切り刻まれた……動物の死体を……！」
「それを何度も繰り返していく内に、どこまで逃げても無駄で、きっといつか彼が私に辿りついてしまうだろうと思いました……今で

も彼が私を追ってきているのではないか、不安です。でも、絶対にあの人には殺されたくなかったんです！！　だから……私は……！！！」

天木さんは一言一言を震える声で発し、どんどん語調が強くなっていく。そして言葉が強くなればなるほど彼女の心の傷も、強く乱暴に触れられ、痛む。涙が、天木さんの目から流れでた。記憶が刃となり、涙という血を流すその姿は、自分を傷つけているかのようで……見ていられなかった。

「それで、私は！！！」

「天木さん！　……もう……やめなよ。何をそんなに悩んでいるのかはわからないけど……だからって、天木さんが自分を傷つける事はない」

話を聞いていても、彼女が悪いところはひとつも無い。なのに、なぜ彼女はこうも泣く？こうも自分を傷つけようとする？

「……遠原……さん。私は……自分を傷つけてなんか……」

「いないって？　それはないよ。じゃあ、なんで最初に自分とその追ってくる男のそんな過去を言ったりしたの？　そんなことをしても、そのころのことを思い出して余計に悲しくなるだけだ」

でも、きっとそれはオレには分からない彼女のこと。その男と歩んできた人生で、彼女が積み重ねてきたものなのだろう。

「……違うんです、遠原さん。そういうことでは」

「……ごめん。こんなこと言って。でも、天木さん。そんなにも悲しかったのなら、こっちはこれ以上君から事情を聞くつもりはない。それと……これ以上そいつのことは思い出さない方がいい」

だから、オレは———彼女が積み重ねてきたものを崩そうとした。数年か、それとも十何年か。長い間彼女が積み上げ、そして、彼女の中に残せばきっと永い間彼女を苦しめるであろうものを、壊そうとした。

「……忘れることなんて、できません……」

だけど、それは出来なかった。きっと、それで苦しむはずの彼女が、許さなかった。
「……こっちも強制したいわけじゃないけど……それで、君は大丈夫なの？」
「遠原さん……私が最初にあの人とのことを言ったのは、最初は無意識でした。でも遠原さんの言った事を聞いて、なぜそんな事を言ったのか分かった気がしてきたんです」
「……それは、どういう？」
彼女はそれまでの口調よりも軽く、口元を歪め、自嘲（じちょう）するように言う。
「要するに諦めが悪かったんですよ、私。逃げていたのに、あのころの彼を取り戻すって心のどこかで思っていたみたいで……だから私が覚えているあの人の姿を忘れないために、その思いが彼を思い出させていたんだとおもいます」
「天木さん……」
「おかしいですよね。逃げている人間が、追っている人を恐がっているのに助けたいなんて。矛盾（むじゅん）っていうのはこういう———」
「おかしなことなんて、何もないんじゃないか？」
彼女の顔を見つめ、オレは彼女の言葉を遮る。彼女は目を見開いてオレを見る。目つきは笑っているように見えたが、目は赤くなっている……やっぱり、おかしいことなんて何もない。
「えっと……その人のことは知らないし、オレがそこまでされても助けたい人っていうのは、すぐでてこないんだけど……自分の気持ちが矛盾している、とかそういうことは気づいたのなら認めればいいじゃないか。合ってない気持ちもその理由も、全部。そうして考えたのならきっと、逃げても救おうとしてもいいんだ。間違いなんて無い。少なくとも、オレはそう思う」
「でも私は逃げたんです……！彼が来ないような、居ないようなところへ逃げようと……！」

「それは……分かってる。だけどオレは――――天木さんの今やりたいっていうことを助けるだけだ。それしかできない。だから、決めてほしい。今の君が助けを望むのはその人か、それとも……君自身か」

我ながら、強引なことを言っていると思った。それに何よりも卑怯だった。彼女が優しい人であるということを知っていて、人を見捨てるかどうかという二択をかけた自分が、とても汚く感じる。

1分、2分と言葉の無い時間が過ぎていく。けれどこれは、さっきの会話をしないだけだったときとは違う。彼女が自分で答えを考える時間を、そんなものと一緒にすることはできなかった。そして時間を数えることを忘れた頃に。

「……遠原さん。私、決めました……あの人を、いえ、私が一緒に過ごしてきたあの人を……取り戻します」

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

彼女の顔にはもう、自嘲するような笑いも、後悔の涙もなかった。胸の奥のつかえが取れた――――そんな顔つきになった彼女にオレからは、もう何も言う気はなかった。ただ一言だけを除いて。

「……そうか。じゃあ、がんばろうか……オレ達で」

「……はい！」

これが、今のオレにできる唯一の励ましだと思っている。彼女――――天木さんはそれを聞いて笑顔を向けてくれた。だけど、それはこの答えに無理やり導いたような自分には、とても眩しくて……照れたように顔を背けるしかなかった。

ふと、そこで天木さんが「あ、でも」となにか思い出したように

言い出した。
「その…少しだけ、なんですけど……遠原さんのこと、信用できなくなっちゃいました。あんな卑怯な質問をするなんて……ちょっとずるくないですか？」
……気づかれてるじゃないか、オレ。え？　何でバレたんだ？　え？　態度に出したつもりはなかったぞ！？　しかもなんか好感度が下がってる！？　うそぉ！？　というか、
「そ、それなら別に助けるっていうほうを選ばなくてもよかったんじゃ……しかもこんな人を騙すようなやり方にのるなんて」
「そうですね。ちょっとイラッとはきました。なんでこんなにも偉そうなんだって。でも……自分で考えてみた答えも結局それだったんです。彼を助けたい…今までは気づかなかったんですけど、気づいたら、考える以上にその想いってのは大きかったみたいで。だから……私は遠原さんの策に乗ってもいいかと思いまして」
天木さんは、てへっ、と言うような感じでちろりと舌を出すのだが……策て。そんな大層なものじゃないと思うが……まぁいいか。
「……うん、でも君もある意味俺の予想以上だったよ……」
そう、予想以上に――――「いい人」だった。優しいとかのレベルじゃなかった。なんだか騙したと思ったら騙された気分だ……。疲れと呆れの籠もったため息が口から漏れる。
「でも、遠原さん。なんでああも無理矢理（むりやり）に私を手伝おうとしたんですか？……遠原さんは、私のことを知らないみたいですけど」
「んー？　……まぁ、父さんがやってることの真似、みたいなものかな。血筋なのかもしれないけど……」
天木さんの話が一段落ついたとおもうと、心にどっと疲れがわく。話の内容が重かったのもあるが、途中で少しかっこつけすぎたかもしれない。体を伸ばして疲れを取ろうとする。
「遠原さんのお父様……ですか？」
しかしまあ……なんだ、完全に雑談モードに入ってるな、二人とも。さっきまでまじめな話をしていたとは思えない。というかこの

空気はどこか友達と一緒に勉強をしてるときの感じだな。途中で力が抜けて完全に話すことがメインになっていって…そうして本来の目的を忘れる。オレにもそんな経験が何度もあったなぁ……。

「そう。紳士的とはいえないんだけど女性に、助けて、とかいわれたら二つ返事でＯＫしたりして。しかも困っているのを隠していてもなぜか分かるみたいでさ、ほとんど無理矢理に近いぐらい手助けしてたよ。確か、樫羽を拾ってきたのも父さんで――――」

「え？　拾ってきた？」

……オゥ、ジーザス。気を緩めすぎて、ついついいらんことまで話してしまった。これも結構面倒な話だからあまり言いたくはないんだが……もう言っちゃったし、話したほうがいいか。

「あー…うん。確か１０年ぐらい前、オレが六か七歳ぐらいのころのこどもの日に父さんがいきなり帰ってきて、女の子を連れてきたんだよ。５歳ぐらいの。で、オレのところにくるなり「この子うちの娘にしないか？」とか言いだして柏餅を与えだしたときは何事かと思ったよ……しかも樫羽が父さんにすごく懐いてちょっと本気にしていたみたいだし……それでいくらなんでも誘拐犯扱いされるのはごめんだから親御さんのところに送ろうとしたんだけど、どこかの異世界から来たっていうことしかわからないし、樫羽ももともとの名前を覚えてないって言うから、とりあえず家で引き取ることになったんだ。で、今のところのあいつの戸籍（こせき）は遠原樫羽――――オレの妹として登録されてるってことかな」

血も何も繋がってないけどね、と最後に付け足しておく。いやー……ほんと昔から父さんの行動には驚きというよりも呆れしか出ない。昔だったからまだ良かったが、今やられたら確実にオレがグレて父子（おやこ）間戦争をおこすことも考えるレベルだ。

ちなみに、樫羽と言う名前は樫羽が父さんからもらった柏餅の「かしわ」という言葉の響きをいたく気に入ったため、名前の分から

ない樫羽のために名前をつけるということになった時、父子で「樫羽」でいいんじゃない？　と適当につけた結果だ。最近になって自分の名前に違和感を持ち出した樫羽には絶対に言えない話である。

「……え、えーと……」

天木さんが理解のできない、と言いたげな顔をしてる。まあ、息子のオレでもあの父親は未だに理解できないからしょうがない気もするが。

「あの……遠原さん」

「ん？　なに？」

「異世界って、どういうことですか？」

……え、そこから？

雨の日の終わり（後）

そういえば、聞いたことがある。今や多くの異世界の存在が知られているが、見つかっていない、もしくは交流が無い世界の方が多いという話を。見つかっていない世界はただ存在が捉えられていないだけで、そこの人間が流れてくることはある。が、交流が無い世界というのはそれとは別で、まずそこの人間がやってくることが希少である。埋蔵金の発掘と同レベルと言ってもいい。

そして、何よりも――――発展してきた文化がとても似通っているということが問題となる。そもそも、今オレ達がいる世界は科学だけで進歩していった結果、異世界というものが存在することさえ知らなかった。あくまで想像の産物としか思われてはいなかったのだ。それを知ったのはひとえに少年が持ってきた異世界という存在の裏づけと、魔術の存在があってこそである。魔術がある世界のほとんどは異世界の存在どころか世界の移動法まで編み出している。魔術だけが進歩した世界でも、だ。勇者の召喚なんかは、その最たる例といえる。

対して科学は、異世界の存在すら捉えられなかった。進歩してきた文化が似通っているということはその世界は科学が主流であるということ。そうなるとこれまで科学だけを進歩してきたこの世界にとって得るものが少ない、ということで交流なんて全く無い。

彼女、天木鹿枝（あまぎかえ）はそんな世界の出身らしい。埋蔵金と同レベルのものを発見するのは運が良いのやら悪いのやら……。どちらにしろよくここに来れたなー、と思う。なにかやったりしたのか聞いてみると。

「えっと、多分なんですけど……二日前の夜逃げている時に、公園に入ったんです。その時、昔本で読んだ退魔の陣っていうのを思い

出して……これで彼に何か影響を与えられないかと思って公園の地面全体を使って覚えていた魔法陣を書いていたら疲れて眠ってしまって……それで朝起きたらここの近くに」

とのことらしいが……公園で寝たとかいろんな意味で危ない状況だな、それ……。さらに話を聞くと、昨日はどこか分からないという状況が怖くて寝られなかったので一晩中歩いていたらしい。夜の女の子の一人歩きも普通に危ないだろう。天木さんはちょっと女性として危ない橋を渡りすぎだと思う。

とにかく、天木さんには説明できる限りの異世界に関することについて聞かせた。身振り手振りもフルに使ってだ。ところどころで頭に疑問符を浮かべていたが、これ以上噛み砕いた説明ができるほど、オレは頭が良くない。というか限界……

「ごめん天木さん、ちょっとこれ以上はどう説明すればいいのか……あとのわからないところは樫羽にでも聞いてもらえる……？」

天木さんはちょっと納得いってなさそうだが、頭を絞り尽くして憔悴しきってるオレを見て、この場は納めてくれた。

「あの……ところでお父様のほうは……」

「さぁ？　何年も前に「俺の最愛（さいあい）の人を助けにいく」って言って出たっきり帰ってこないから、今日も帰らないと思うけど……」

たぶん母さんのことだと思うが、母親の記憶というものがオレには全くないので、いったいどんな人なのかはわからない。しかし、父さんがオレに「最愛の人」と言っていたのだから、多分すごい人なんだろうけど……。天木さんは、帰ってこない、の部分に反応して焦ったような表情を見せる。

「あ、あの、あまり聞いてはいけないような話だとは思うんですが、それって失踪じゃあ……」

「どうなんだろう？　オレたちが心配してもしなくてもいつか帰ってくるだろうから気にしたことがないなぁ」

「そ、そうですか……すみません」

謝らないでいいよ、とシュンとした天木さんに言ったが、気にしているのか表情は変わらなかった。でもあの父さんだからなぁ……帰ってこないで手紙で「もう俺ここに住むわー」とか送ってくることがありそうでこわい。さすがにそれはないと信じたいが……うーん。

その時、コンコン、とノックの音が聞こえ、樫羽（かしわ）が様子を伺うようにして入ってきた。

「……兄さん、天木さん。話はまだ続いていますか？」

「樫羽……いや、もう終わったところだ。ちょっと別の話で長くなったけど」

「そうですか。夕食のあとから二時間近い間、兄さんの部屋から音がしませんので少し心配になりましたが、話はついたみたいですね。それで兄さん、別の話とは？」

「あー、まぁ世間話みたいなもんだ。特に大事ってこともない。何か用があったりしたのか？」

「いえ……ただ、もう夜も遅いので天木さんはどうされるのかと。さすがにお客様を居間で寝かせるのはどうかと思いますし……」

時計を見てみると、現在時刻は２３時の少し前だった。天木さんは時間の流れに気づいていなかったようで、時計を見て思い出したように欠伸（あくび）が出ている。そういえば一晩中歩いていたっていってたし、ほぼ徹夜だったのだろう。それに彼女の実家はこの世界にはない。となると、確かに泊めざるを得ないのだが……ちょっと待て。

「樫羽。なんで天木さんが泊まるってわかってるんだ？」

それを聞かれた樫羽はすぐにそっぽを向いて、

「……いえ、この時間に女性を帰らせるのは危ないと思いまして」

と普段どおりの口調で返してきたが……こいつ絶対聞いてただろ、というのが丸分かりな態度だ。オレも天木さんに策？　がバレたし、もしかして普通の兄と妹以上に兄妹らしいんじゃないか？と思ったが、正直それはどうでもよかった。早く天木さんが寝る場所を決め

ないと、このままテーブルで寝てしまいそうだからだ。

「よし、樫羽。明日は父さんの部屋の中を片付けよう。それから天木さんにはそこで寝てもらうとして、今日はこれから二人で問題を解決するということで親密を深めるためにオレと天木さんが一緒に「兄さんってパンチングマシーンみたいな顔ですよね」うそですごめんなさい！」

ちょっと調子に乗ったら頭を下げることになった。どうみても兄妹らしい姿ではない。普通の妹は兄の顔をパンチングマシーンなんかとして扱ったりはしないはずだ。周りに兄妹がいないからよくわからないが、そういうものだろう。夢なんて見てないぞ？

樫羽がやれやれ、といった風に握りかけたこぶしを下ろす。だが、その目は家族を見るにしてはおかしいんじゃないかね？

「……まったく兄さんは。とりあえず天木さん。今日のところはわたしの部屋で寝ましょう。二人で寝れるくらいには広いですし、なにより兄さんの手が届くところには置いておけません……兄さん、それでは」

樫羽が天木さんに呼びかけると天木さんは立ち上がってついていくのだが、どうにもまっすぐ進まないわ、目が開いてないわで危なっかしい。樫羽が肩を貸して出て行こうとするが、樫羽には少し聞きたいことがあったので天木さんを寝かせたらここに下りてきてほしいといっておく。

「それじゃ、天木さん。おやすみ」

すでに起きてるんだか寝てるんだかわからない天木さんにそういうと、天木さんはこっちを見て……形容するならば「ニヤァ～」という擬音が似合うような笑顔をこちらへ向けてきたが……あれってどういう意味なんだ……？

結局二人が出て行った後はその顔の意味を考えていたが、何も浮かんではこなかった。

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

数分後、樫羽が居間に戻ってきた。やけにはやかったが、どうも布団を敷いたらボディプレスでもしたいのか、と言いたくなるようなダイブを布団にしてそのまま寝てしまったとのこと。天木さんは天然なのか何なのか、よくわからなくなってきた。

樫羽が向かいのイスに座って、話を聞く姿勢を見せる。

「それで、兄さん。聞きたいこととは何ですか？」

「少し気になっただけなんだが……天木さん、なんだかお前が部屋に行ってから緊張が解けたようになってたんだよ。それでオレがいない間になにかあったりしたのかな、と」

樫羽は、ふむ、というような感じで口元に手を当てる。考える――というわけではなかったらしくすぐに口を開いた。

「心当たりというものはないですね。まぁ、もしかしたら、というものはありますが」

「もしかしたら？　なんかきついことでもいったりしたのか？」

「そういうことではなく……わたしの存在に違和感を感じていたのかもしれませんね。単純に慣れたのかもしれませんが」

「……違和感？　なぜ会ったこともないのに樫羽に違和感なんて感じるんだ？」

「彼女がもと居た世界の兄さんに会っていたら、そうではないかもしれませんよ？　わたしは元々ここの娘だった、というわけではありませんし……でもそれはあくまで仮定でしかない話ですから、聞かないほうがいいかもしれませんね」

もうこいつ聞いていたことを隠す気もないな。しかしもと居た世界のオレ……か。確かにそんなことはあるとは思えな――――くもないな。寧ろそれのほうがしっくりくる。

「なぁ樫羽。オレ、天木さんに会ってまだ名前もいってないうちに

「遠原さん」って呼ばれたんだが……」
「……じゃあもうほとんど確定じゃないですか。というか、そういうことはできる限り最初に言ってください。まったく、なんでこんな事もわからないんですか、バカらしい」
　えぇー……なんか、すごいボロクソ言われてるよー……確かに考えても仕方ないからと投げ出したオレが悪いのかもしれないけど、まさかここまでいわれるとは。これが年上のお姉さんとかに言われたならまだいいが、年下の妹に言われるとちょっと泣きそうだ。しかも少し様になってるあたりがよけいきつい。
「聞きたいことはそれだけですか、兄さん？」
「あ、ああ……それだけ、かな？」
「なぜ疑問系なんですか。別にいいですけど……ところで兄さん。わたしからも聞きたいことがあるんですが、いいですか？」
　いつもならば「いいですね？」というように、あまり話を聞こうとしない樫羽にしては珍しい、確かめるような言葉だった。なぜ急にこんな態度になったのかはわからないが、それでも拒否する理由はない。
「いいですか、なんて言わなくていいだろ？　家族同士でも少しは気を使ったほうがいいとはいえ、いきなりそんな態度でこられたら焦ってしょうがない」
「そうですか。では兄さん……聞きたいのですが……わたしは、兄さんの妹であるつもりです。たとえ血が繋がっていなくても、そう思っています。でも兄さんは……わたしを戸籍上の妹でしかないと……そう考えてるんですか？」
　……全部聴いてたんじゃないか。もう盗み聞きしていたことを誤魔化す気はないのかと思う。しかしそれよりも今聞かれたことが気に食わない。
「……そんなわけないだろう。オレはお前がただの妹だなんて風には思ってない。殴られても罵られても構わない。オレはお前の兄でいたいんだ。いつまでも……たとえお前の本当の両親が来ても……

お前の兄をやめたくない。お前は――――大切な妹、だよ」

樫羽が、それを聞いて安堵したかのように表情を和らげる。普段少し笑うことはあっても、表情がそこまで変わらない樫羽としては、かなりの変化だ。勢いでここまでいってしまったが、実際にウソを言ってはいないのだから問題ない。ただちょっと自分がシスコンに見えるというだけだが――――まぁ、いいか。シスコンでも。

「……ありがとうございます、兄さん。……わたしも――――」

何か言いかけた樫羽の意識が、飛んだ。テーブルにガン、と額をぶつける。ケガをしてないか心配になったので、近づいて意識があるかどうかを確認しようと顔をぺしぺしと叩く。

「……ぅ」

あ、意識はあるのか。じゃあ大丈夫だな、と思いかけた瞬間。

「……えへっ♪　おっにいちゃーーん！ひっさしぶりー♪」

……お兄ちゃん？　ま、まさかこいつ……！

「お、お前「カシワ」だな！？　何でまたこんなときに……！」

『カシワ』とは、普段は遠原樫羽の中に眠っている人格のことである……というか、多分こちらが本来の樫羽なんだろうが、こうして表に出てくること自体が少ないので基本的に裏人格という扱いをしているのだ。

普段の樫羽との違いは……まぁ見ればわかるかもしれないが、とても素直だ。普段も気に入らないことを正直に言うという意味では素直ではあるが、こちらは人への好意をとても強く表に出す。特に先ほどの「お兄ちゃん」なんていう発言なんかもろにそれだ。最初にオレを兄と呼んだのもこの『カシワ』である。二年前まで普段の樫羽からは天木さんのように「遠原さん」と他人行儀な呼び方をされていたが、『カシワ』からは最初からお兄ちゃんと呼ばれていた。ちなみに樫羽が初めて兄さんと呼んでくれた時は嬉しさで枕を濡ら

した。
『カシワ』が驚いているオレに対して少し不機嫌そうな表情を向けた。
「むー、久しぶりに再会したんだからもうちょっと嬉しそうにしてもいいでしょー？」
「いや、再会っていってもいつもの樫羽とは毎日顔を合わしてるし……というか、その顔で子供みたいなこというなよ」
「あー、そうだった。もう子供じゃなかったねー……ワタシ」
そういって自分の胸を下から上げ下げして擬似乳揺れとでも言おう行為を行っていた。……こういうところを見るとたまに樫羽を妹じゃなく一人の女性に見そうなことがあるが、理性とは案外強いものである。しかも揺らすといっても上下する程度だ。この程度で折れる心はしていない。
「ちょっとは反応してよー、お兄ちゃん？」
「ふ、ふん！天木さんより少し大きい程度じゃオレの理性は折れないね！！」
でもじっくりとは見ちゃうんだなー。だって揺れてるんだぜ？普段は見れないような光景だぜ？　ただ妹なのが哀しいってだけで……ついでに天木さんの胸まで見ていたことに気づくと死にたくなってきた。服越しとはいえサイズを目測とかセクハラもいいところじゃないか……
「へぇ～、そうなんだ～……えいっ！」
いきなりカシワが上半身に抱きついてきた。しかも完全「当ててんのよ」仕様だ。顔の話だが。どうやら胸を当てにくるような子には育たなかったようだ。残念とは思わん。
オレの胸に顔を擦り寄せてくる『カシワ』の顔は満面の笑みに塗りたくられている。樫羽の顔なので違和感は拭えないが、それでも嬉しい気持ちが伝わってくるので、こっちも笑顔になってしまう。
「カシワ……」
「あぁ～、お兄ちゃんが一生ワタシのそばにいてくれるなんて、嬉

しいなぁ～！」
「待て、そこまでは言ってないぞ！？　というかそういう発言は止めろ恐ろしい！」
　病んだ妹とか全力でお断りする。特に『カシワ』に殺しにかかられたら本当にやられた挙げ句「ズゥット、ィッショダヨ……」とか言われそうだ。
「あはは、今のはさすがに冗談だけどさっきの言葉が嬉しくてね、つい出てきちゃった。はい、サービスしゅうりょ～」
　『カシワ』がオレから手を離して元のイスに座る。しかし『カシワ』は本当に、樫羽とは真逆だなぁ……普段からルンルン気分でスキップしてそうな『カシワ』が普段は動じぬ心できれいに歩く樫羽の体を使っていると誰やねんと言いたくなる。まぁ可愛いからそれでもいいけど。
「さっきのって……あのお前の兄で、ってやつか？」
「そ。だっていつまでも家族でいてくれるって本気で言ってくれたもの。あの子もうれしくなるよ」
　『カシワ』はいつも、樫羽のことを「あの子」と言う風に呼ぶ。『カシワ』のほうはもう一つの人格を認識しているのだ。対して樫羽は別の人格というのをわかってはいない。記憶が無いときがある、としか思っていないようだ。人格が変わっているときの記憶もないので、単純に『カシワ』のほうが上位の人格なのだろう。
「本気で、ねぇ……基本いつも本気なんだが」
「それなら、今日はいつもよりも本気だったってことだねぇ。最近は不安だったみたいだよ？　あの子」
　「……そうだったのか？　じゃあこれで悩むこともなくなるな」
「いやそんな軽く言わないでよ……本気なんじゃなかったの？」
「何言ってるんだ。これで本気だ」
　これは自信をもって言える。なのに『カシワ』は呆れた顔で、ジトーっとこちらを見ていた。なぜだ。
「……あぁ、そう……ワタシはお風呂にでも入ってもう寝るよ……」

「そうか。じゃあオレも寝るかな」
とりあえずそろそろ本格的に寝たいので部屋に戻ろうとすると、『カシワ』がなにか悪いことを思いついたような顔をして笑う。
「……あ、一緒に入る？」
「……誰が入るか」
当然だ。そんなことをすればこいつのことなので、途中で確実に樫羽に体を渡してオレが血祭りに上げられる。そもそもまず中三と高二の兄妹が一緒に風呂に入るわけがあるか。
「ふふ、やっぱり本気じゃなかったね～。お兄ちゃんなら女の子との混浴を断るわけが」
「調子に乗るな、このバカ」
『カシワ』にペチン、と軽いデコピンをお見舞いして、部屋へと戻る。「あぅぅ」とか後ろから聞こえても気にしない。風呂はさっきシャワー浴びたから別にいいだろうし、もう寝るつもりだ。

ベッドの上で横になって寝ていると、誰かが部屋に入ってきたのに偶然気づいたが、眠いので話す気はない。とにかく眠る。
――――ありがとう。
そんな言葉が聞こえたような気がすると同時に、オレの意識は沈んだ。

疾風に及ばず

――――ネズミか。そう感じて手を伸ばしてみれば、あっけなくネズミの尻尾をつかむことができた。逃げようとしても、尻尾をつかまれ宙吊りのような状態だったのでネズミは満足に動くこともできない。それでも、逃げようとするのはうざったかった。黙らせてもいいが、こんな小さなものをエサに使うのはもったいない。大きくするために与えるなら、より大きなもののほうがいい。

――――ああ、手の中で逃げようとしてるからうざいのか。だったら、逃がしてしまおう。尻尾を離し、ネズミが地面に落ちる。着地したネズミはそのままどこかへと駆けていった。小さな体を生かし、これから地上や地下を走り、エサを求めるのだろう。

エサ。そうか。別にここにだけこだわる必要はないな。ネズミが何も気にせずに食い散らかすのに、なぜ人間が遠慮をする必要がある。大きなエサとなるなら、犬や猫にこだわる必要はない。ただ、刃物だけでは、より巨大なトラなどには勝つことはできないし、見つけるのも難しい。

ならば、その辺りにいくらでもいるじゃないか。それを刈ればいい。街中では人間以上に大きくて数の多い生き物などいないのだから。

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

目の前に、小さかったころの樫羽がいた。自分の姿は見えないが、

樫羽より少し高いくらいの目線なので、ちょうど同じぐらいの頃の背丈か。昔のころのオレたちだけが、そこにいた。周りはなにもない、白だけの世界。足の着いている地面も見えない、何もない世界だった。夢――――だろうか。

「遠原さん」

目の前の樫羽が、昔の呼び方でオレを呼んだ。ただの知り合いを呼ぶかのように平坦な口調。兄としての役割を必死にやろうとしていたあの頃は、毎日のようにこの言葉が胸に刺さっていた。兄ではなく、ただ世話をしてくれる人としか思われていなかったのか、真剣に悩んでいた。だから「兄さん」という言葉がうれしかったんだ。

だからやめてほしかった。遠原さんと、呼ばないでほしい。

「遠原さん」

やめてくれ。その言葉が、口からでない。思うだけで頭の中に、この世界にその声は響く。しかし、樫羽には届かない。

「遠原さん」

やめてくれ！　頭の中で叫ぶ。樫羽の表情は変わらない。涙が、頬を伝うのが分かった。口でしか伝えられないのか？　しかし言葉は発せられない。オレの思いは、彼女に届かないのか？

「遠原さん」

樫羽がその言葉を繰り返す。届かないのか？　本当に？　試してみなければ分からない。手足が動くことを確認し、オレは樫羽に駆

け寄る。

「遠原さ」

そしてオレは、樫羽を抱きしめた――――

「あ、あの……遠原さん……？」

樫羽とは違う声が、頭の上から聞こえた。おかしいな。確かオレはベッドにすり寄るように寝て、夢の中で樫羽を抱きしめていたと。

「……え？」

気づいたら、何かを抱きしめていた。だがこの家に抱き枕なる物はないし、こんな腰のようなくびれや、胸のような膨らみがあるはずが……

「！？」

そこですぐに気づいて回した手を離す。そしてゆっくり上を見てみると、こちらを見て、涙目になってる天木さんがいた。あ、なるほどそうだったのかー……笑えねぇ。

「……あ、あのさ、天木さん」

「……はい」

目に涙を浮かべた天木さんは拗ねた子供のようでとても可愛らしい。可愛らしいのだが、それよりも今は――――

「天木さん、けっこういい体してるね！」「失礼します。兄さんも天木さんもいいかげんに降りて食事にしま……しょう……」

――――お礼を言ってから地獄へ旅立とう。オレの目測など大外れで、親指たてて感謝してもいいくらいのものだった。昨日の樫羽よりもナイスなスタイルに礼を言わずしてなんとするのか。これで来世があるかもしれないなら、オレは喜んで変態の汚名を受け入れる。涙目の天木さんを見てすべてを察した樫羽の成敗の拳が顔に――――あふん。

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

「いいかげん、兄さんは女性に近づかない方が良いのではないですか？」

寝起きの一発をもらってから顔を洗い、居間に行って朝食を食べている最中に樫羽から言われた一言だ。昨日からすでに不埒と言われていいような事を散々やったので何も言えない。

顔に痣ができそうでできない、でもなんだかできそうな感じがする痛みを気にして食事をしていると、どうしてもゆっくり食べる羽目になってしまう。どうして今日に限って米と味噌汁と魚の切り身なのかは知らないが、樫羽はすでに制服に着替えている。

――――そう、学校だ。樫羽だけじゃなくオレにだってある。なのでこのスピードは少々まずい。一応こっちも着替えは済ましたのでやろうと思えば、朝食を中断することも可能だ。だがそれ以上に厄介な理由があるのが困る。それは……

「遠原さん、あまり急いで食べると体に悪いですよ？」

天木さんがかっこむように食べていたオレを心配そうに見ていた。さっきはあんな事をしてしまったのに寝ぼけていたから、ということで許してくれた彼女の優しさは心にしみる。樫羽がちゃんと罰を与えたからというのもあるだろうが。

「あ、あはは、ごめん天木さん……本当に……」

「……もうその話はいいですから……」

さっきのことを思い出したのか、天木さんの顔が赤くなった。彼女はそれを隠そうと向こうのほうを向くのだけど……それがまたいじらしい。もう一度抱きしめたくなってくるが、樫羽が目を光らせているのでそれはできそうもなかった。

そうこうしている内に完食し、食器を洗おうとすると、天木さんに止められた。

「私がやりますから、お二人は学校へ行ってください」

一瞬、天木さんが何を言っているのか分からなかったが、樫羽が天木さんに対して反論する。

「いえ、天木さんには朝食も作ってもらったのに……ここは兄さんと私が」

朝食？そういえば部屋に来たときから天木さんはエプロンをつけていた。もしかして、先ほどの朝食は天木さんが作ったのか？

「いえ、私は何もやることがないんですから、二人は早く学校に」

「あのさ、天木さん」
「は、はい？」

うわ、つい口がでた！？考えなしに話しかけたことを後悔したくなる。天木さんと樫羽が怪訝そうな顔でこちらを見ているので、何か言わないといけないのだが……えーとえーと……。

「……あ、朝ご飯おいしかったよ！　それじゃ！！」
「に、兄さん！？」

何を言えばいいのか分からないので、正直に思ったことを言って逃げた。居間から廊下へ、廊下から玄関へと走る。靴を履いたところで、樫羽が追いついてきた。

「兄さん、カバンを忘れています！」
「わ、悪い、樫羽！」

焦りすぎてたみたいだ。樫羽からカバンを受け取り、ドアを開ける。とにかくこのまま学校へ！

「「……あ」」

昨日のような雨雲が無い空を感じるよりも先に、家の前の道に深根魔術校の女子制服を着た知り合いがいることに気づいた。樫羽よりも長い、黒よりも紺に近い色の髪を高い位置でポニーテールにした、それだけならばどこにでも居そうな子だ。
ただ右手に持っている３ｍ前後の長い、布にくるまれた『何か』が彼女の異様さを引き立てる。およそ一人の少女が扱いそうなもの

ではない。

「……ふっふっふ。まさかここでお前と会えるとは」

「……いや、会えるも何もここがオレの家なんだから当然だとおもうが……」

「出来ることなら朝の鍛錬の時に出会いたかったが、致し方無い……」

そういって彼女――――那珂川那須野（なかがわなすの）は何かをくるんだ布をはぎ取り、そこから出てきた金属製の細身の槍に小さな斧の刃がついた武器――――ハルバードを構えた。話はちゃんと聞けよオイ。

「さぁ、始めるとしようか！！」

「……道端でやるのは気が進まないんだけどな」

そう言いつつも、路上には出る。こいつとはちょっとした約束をしているのだ。街中で出会ったらその場で組み手をする。理由はまぁ、自分のせいってところだ。ただの知り合いなら出会う確率もそこそこ程度だろうが、学校が同じなのでほぼ毎朝確実に出会うことになる。これのせいで毎日早めに出る羽目になっているのには若干の後悔があった。

「あ、あのー……これはいったい……？」

家の中から、天木さんが顔を出してきた。ちょうどいい。手に持っているものが邪魔になるところだ。

「あー、天木さん、悪いんだけどちょっとこのカバン持っててくれない？　樫羽も先に行っててていいぞ」

「え、はい、わかりました……？」

「……そうですか、兄さん。できるだけ早く、お願いしますね」

樫羽が一瞬、那須野のことを邪魔者のように見ていた気がしたが、すぐに樫羽は行ってしまった。那須野も気にしていないのか気づいていないのかは分からないが、何も言わないので放置しておいて、天木さんにカバンを渡す。

「準備は、よいか？」

「ああ、いつでもこい」

足に力を込める。視界の端で天木さんがあたふたしていたが、今見なければいけないのは、目の前の那須野の動きだ。

「では……参る！」

那須野が姿勢を低くして深く一歩を踏み込み、そのままこちらを突いてくる。『以前』よりも速くなっているが――――読み通りだ。余裕を持って右に避ける。しかし那須野も甘くはない。

最初の突きはあくまでも攻めの初手だ。すぐにこちらが避けた方向に払ってくる。だからこちらは右に避けた後ですぐにバックステップをし、払いの届かない距離へ下がる。那須野のこちらへの払いはかすりもしない。

ただ、そこから那須野の猛攻は始まる。オレを真正面に捉えた那須野はそこから距離を懐に入りすぎないように詰め、槍としてのリーチを活かした突きを連続で行ってくる。

最初はまだ避けることはできたが、次第に紙一重での回避になってゆく。回避、回避、かすり、回避、かすり。顔や手にどんどんかすり傷が増える。制服に傷がつかないのは那須野の腕のおかげだ。

そしてついに――――那須野のハルバードが身体に当たる直前で止まる。

「……ここまでか。では、次は本気で来てもらおう」

「……了解。ちょっと待ってろ」

お互いにもう一度距離をとって構えなおす。意識を集中させようとしたところで、先ほどの組み手の最中からボーっとしていた天木さんが慌てたように声を上げる。

「ふ、二人とも何やってるんですか！？　こんな道のド真ん中でいきなり斬りつけてくるなんて……！」

「いや、大丈夫だよ天木さん、こいつは一応知り合いだから。斬りつけるって言っても命をとらないように手加減してるらしいし、なによりうっかり致命傷を与えてしまうような腕じゃないからね」

「……む、新顔がいたのか。某（それがし）は那珂川那須野という。以後よろしくお願い申す」

天木さんの事にようやく気づいた那須野は、天木さんに対して軽く一礼した。そしてすぐにこちらへと向き直る。あくまでもこちらを優先したいようだ。

「あ、こちらこそ……ってそうじゃなくて、このままだと遠原さんが！」

「うーん、なんて言えばいいのかなぁ……まぁとりあえず、気にしないで見ててよ。……このままやられっぱなしってわけじゃないから」

説得しようにも時間がかかりそうなので、心配するようなことだけはない、ということだけを伝える。天木さんはいささか納得のい

っていないような表情だったが、どうにかこの場は抑えてくれたようだ。

「……わかりました。帰ってきたらちゃんと話を聞かせてくださいね？」

「分かってるよ。あとでちゃんと全部聞かせる……すまん、待たせた」

「なに、気にしてなどいない。目の前でいきなり戦いが行われていたら誰だって止めようとする……それよりも早くしてくれないだろうか？」

気にしてないって言ってたじゃないか、という突っ込みは心におしとどめる。時間がないのも事実だ。

深く、呼吸をする。頭と体を落ち着けるためにだ。そして自分にとって馴染みのあるキーワードを頭の中で呟く。

「（……人物表示（リストアップ）。条件は……『那珂川那須野と関係のある者』、とかでいいか）」

脳に何かが繋げられたような、そんな感じがする。しかし不快感はどこにもない。当然だ。実際に繋がっているわけではないのだから。やがて数名の人物の情報が頭に入ってくる……関係のある者というのは少し失敗だったかもしれない。余計なものまでついてきた。

「（ま、しょうがないか……確か那須野の相手をするときは、『こいつ』だったよな？）」

その数人の中から一人の老人を選択する。口元に白い髭を生やし、穏やかそうな雰囲気を出す様はまさしく好々爺（ここうや）といえる。しかし認めたくないなぁ……これが『自分』だなんて、と頭の中で愚痴るが、

どうにもならないことなので諦めるしかない。老人を指定すると、次はこの老人のどこを自分に写すかを決めなくてはならない。

――――そう、写すのだ。この老人を自分に。遠原櫟に――――別の世界の遠原櫟を自己複写（コピー）する。これが自分がなぜか持っている能力（ちから）だ。正直よその自分を写すとかそこまで使えるようなものには見えないが、持つ人間によっては大きな力となる。一般の高校生たるオレがこの老人を写すことで、槍術に関してはほぼ誰にも引けをとらないであろう那須野と互角に戦うことができるようになる、と言えば分かるだろうか？まぁ所詮はコピーなので満足に性能を活かせないわけだが……この状態で那須野と互角とかどんだけ強いんだよこの爺さん、もとい遠い世界のオレ、とは何度も思ったことだ。

コピーできるのは、性能（ステータス）、武装（アイテム）、知識（メモリー）、身体（ボディ）。この４つだ。

性能（ステータス）はその名のとおり、その人物の基礎体力や素早さなどのことだ。知能は知識のほういっているみたいだが、これだけでも充分である。これを濃く写すことで写す対象の持つ特別な技能なんかも扱えるらしいが……まぁ、ちょっと危険が増えるので基本的にはそこまで使わん。

武装（アイテム）もまぁそこまでは変わらない。本人の使う武器や防具を写すことだ。防具まで写すと衣服がどこかへ消えてしまうので武器だけ写すのが懸命だ。調子に乗って樫羽の前で防具なんかコピーするんじゃなかったな……。

知識（メモリー）も……というか全部深い意味はない。これは対象の記憶や知識なんかを写す。使った経験が無いのでこれは飛ばす。

身体（ボディ）は、写した対象に見た目が変わる。それこそゴリラ並みのマッチョからロリロリ幼女まで。ゆりかごからジャングルまでだ。変わっている間は見た目が気持ち悪い上に、身体中が痛くなるので封印している。やっぱり男がよその世界でグラマラスなお姉さんになってるわけがないんだよな……チクショウ。

当然デメリットもある。この能力は長い時間使うことができないのだ。せいぜい30分くらいしか持たない。その後のインターバルには使用していた倍の時間を要す。長期戦にはまったくむいていない、切り札にせざるを得ない能力だ。とりあえず、今選択するのは性能と武装だ。知識も身体も必要ではない。最後に、その二つを選択したことを頭の中で宣言する。これで――――

「（選択（セレクト）完了……読込（ローディング）開始！）」

――――準備は完了だ。

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

体に力がみなぎってくる。先ほどまでの自分と比べると、差は歴然としていた。拳を打つ速度。足の踏み込みの速さ。全てが違う。別人になったようとはこんな感覚か――――半分くらい別の自分を写しているのでなんとも言えんが。

そして、手には武器が握られている。仕込み杖だ……最初に見たときに、そうだよね。もう爺さんだもんね……と空しくなったのは内緒である。

杖から剣を抜きさり、構える。片手でもてるほどに軽いが、那須野の攻撃を流すことができれば問題ない。

「……よし。来い、那須野」

「……ようやくか。ずいぶんと待たせてくれたなぁ！」

苛ついていたのかその言葉とともに、槍の部分がギリギリで届く距離からさっきよりも速くなった突きをこちらにしてくる。だが、

今の状態ならばかわすことは先ほどよりも楽だ。体を捻って避けるとすぐさま次がくるが、それはこの仕込み杖で弾く。ただ体を使って避けるだけではなくなったのは大きい。「どちらかが一撃当てたら終わりでいいが、こちらは確実に当てられると思わない限り攻撃をしなくていい」という条件でやっているからかもしれないが、彼女の攻撃はそれだけ正確だ。避けながら攻撃というのができるほど甘くはない。

那須野の突きが段々と深くなってくる。ハルバードのリーチは確かに活かせているが、このままいけば彼女は大きな隙を――――

「ハァッ！」

晒した！避けられて苛立っていたからとしても、焦って両手で全力の突きをした方が悪い。ここで一気に終わらせ……待て、ハルバードの柄が横から……！？

「甘いッ！」

振りかぶりかけていた仕込み杖で横から来るハルバードの柄を受け止めようとしたが、間に合わない。その攻撃をもろにくらってしまう。柄とはいえ、金属製の棒が直撃すれば体には響く。めり込むような音はしなかったが、脇腹が痛い。骨が折れるまではいかなかったにしろ痛みは激しく、そのまま地面に膝をついてしまった。

「す、すまぬ、大丈夫か！」

「あ、ああ……骨は折れてなさそうだ。しかし……焦っていたのは俺のほうだったか……」

駆け寄ってきた那須野にそれを伝えると、胸に手を当てて安堵し

たような顔を見せた。骨を折ったかどうかだけでも不安だったのだろう。時間が無いからとすぐに勝負を決めようとしたのがいけなかった。周りを見ることを忘れて突っ込むなど、愚の骨頂と言える行為だ。元々自分から望んだ事ではないにしろ、負けというのは悔しい。

「そうか……あまり手加減も出来なくなってきたな。お前がそれだけ奴に近づいてきているというわけだが、それだとどうにも本気でやりたくなる」

「……その方が本来の目的に近づくとはいえこんなことになるなら、本気の勝負にはしたくないな……」

立ち上がりつつも、頭の中で「消去（デリート）」と呟く。そうすることで手の中の仕込み杖や体の中にたぎっていた力は消えていく。残るのはいつもの自分だけだ。ちょうど脇腹の痛みも引いてきた。そして忘れてはいけないことを確認するように口に出す。

「……さて、そろそろ走らないと学校に間に合うかどうか危ない訳だが？」

那須野は一本取れたことが嬉しいのか、鼻歌交じりにハルバードをもう一度布にくるみ始めていたが、これを聞いて驚愕の表情をしてこちらを見てきた。

「なに！？　もうそのような時間であったか……！」

「いや忘れるなよ……とりあえず走るぞ。あ、天木さん。カバンありがとうね」

その場で固まったように動かない天木さんから預けていたカバンを頂戴して、準備に手間取りそうな那須野をおいて先に行く。

「ま、待て！　某を置いていくな！！」

ああ、負けたことは悔しい。だから――――別に先に行ってしまってもかまわんだろう？

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

結論から言うと、逆に先に行かれた。全速力で走っていたら、その横を風を切るようなスピードで那須野が駆け抜けて行き5秒もかからずにオレの目には見えない距離まで走っていった。自前の脚力だけとは思えない速度だったので、恐らく脚力を上げる魔術でも使ったんだろう。魔術に携わった人間しか恐らく知らないことだが、通常の魔術はきちんと手順を追った詠唱さえすれば、ほとんどの人が簡単なものは使用できる。しかし肉体を強化するような魔術を扱うためにはまず元から丈夫な体が必要となる。

なので、常日頃から金属製のハルバードを振り回すような那須野にはできても、オレにはできない。あれさえ使えれば遅れることは絶対に無いのだが……凡人は凡人らしく走るほうが性に合ってるんだ、と那須野を羨みながら、もしくは自分を慰めながら走って行き、教室に着いたのはＨＲが始まる5分ほど前だ。息を切らして入ってきたオレのことなど誰も目に留めずにみな友達と談笑している。

まぁそのほうが気楽だわな、と思いつつも席に荷物を置いていると先ほどオレが閉めた扉がガラリと開く。

「いよっしゃぁぁ間に合ったぁぁぁ！！」

「うるせぇ！」「黙って入れ！」

開いたと同時に大音量の声を撒き散らして周囲に怒られながら入

ってきたのは神田葉一（かんだよういち）。前髪以外の髪の毛をそれなりに伸ばし、前髪だけはやたらと短い鳶色の髪をした男だ。熱血的な事とエロ……もとい色を好む、昔馴染みでもある。こいつの家には那須野も住んでいるのだが、那須野は早く起きていた筈なのになぜこいつはこんな遅いんだ？と思っていたら、葉一がこちらに近寄って話しかけてきた。

「いよう、お前も相変わらず早いな！」
「ああ、おはよう葉一。早いって言っても、オレもお前の４０秒くらい前に来たばかりだぞ？　そんなには変わらないよ」
「いやいや、その割には涼しい顔じゃないか。余裕でも持って歩いてきちまったのか？」
「違うよ。ここに来る途中で那須野に会ったんだ。それで、いつもの『アレ』だ……というかお前、何で那須野よりこんなに遅れてんだよ」

那須野の名前を出すと、「うっ」とばつの悪そうな顔をし、聞いてもいないのに理由を自供しだした。

「い、いやぁ……なんか最近避けられてて、朝も起こしたりしてくれなくてさぁ……理由はよくわからないんだけど……」
「嘘つけ。お前がそういう態度のときは大抵お前が悪いんだぞ？ちゃんと謝ってこい。二度としないとも言えよ？」
「な……！　何を俺が悪いって証拠だよ！」
「……前に相談されたんだよ……お前がやたらと体を触ろうとしてきてうざいって……どうせそれだろ？」
「いやーそれにしても、那須野はまだお前と戦おうとするんだな！」

こいつ、自分が不利と見るや即座に話を切り替えやがった。どう考えても今その話をするのはおかしいだろ！

「いや、そうじゃなくてお前のボディタッチがうざいっていう」「まだ実力が足りないとか思ってるのかな！」

……なんだこいつ、普通にうざいな。こっちの話を聞く気はないみたいだし、しょうがない。そっちに乗ってやるか。

「……まぁ、どうなんだろうな。あいつと組み手をしてて、どんどんあいつの敵に近づいてるとは言われたが……」

那珂川那須野がオレと鍛錬をしたがる理由、それはひどく単純だ。殺された両親の敵討ち――――元の世界で武人であった彼女の家族たちを殺した老人、『遠原櫟』への復讐のためだ。

自分の腕を磨くためにこの世界にきた彼女がオレ達と出会ったのは、この馬鹿が俺を街中で大声で呼んだせいだ。それで出会い頭に襲ってきた彼女を相手に、自己複写の能力を使ったりしてどうにか落ち着かせると今度はこの能力に興味を示してきた彼女に「別世界の自分を写すことができる」と言うことを教えると、今度は頭を土下座するような勢いで下げながらこう頼まれたのだ。

「どうか、その力を某に貸してはくれまいか」……と。

そこで彼女の事情を聞いて『遠原櫟』を打ち倒すための修練に付き合うことを決めたのだ。世界が違うとはいえ、自分がそんなことをするのは我慢がならないということと、とにかく必死だった彼女のために。

「ふぅん……まぁ、いいんじゃねぇの？　それならもともとの目的に近づいてるってわけだし」

「……お前、俺と同じこと言ってるぞ？」

この不利と見れば即座に話を変えたがるようなやつとは同じになりたくないなぁ……

「お前みたいな内側にスケベを封じてるようなやつとは一緒にされ

たくねぇなぁ……」
……もうやだこいつ……なんでここまで被るんだよ……と心の中で頭を抱えていると教室の前のほうのドアが開き、担任の古賀が入ってきた。周りの生徒たちも各々の席へと戻っていき、自動的にＨＲが始まる。

「よーしみんな、まず最初に報告しなきゃいけないことがある。今日の１時間目の数学だが青海先生がいまだに引きこもって出てこねぇ。よって１時間目は」
「自習ですねわかります！」
「ちげぇよドアホ。自習じゃなくて実習だ。『魔術実習』の授業だっての。それじゃ後は出席確認したらＨＲは終わりな」

いまだに家から出てこないって……もしかしてオレの補習の時から学校に来てないのか……？　そこまでいくとなにかあったんじゃないかと疑ってしまう。そんな中、一人の女子生徒が「先生」と古賀を呼んだ。

「ん……どうした松本」
「青海先生が来ない理由ってなんですかー？」
ちょうどいい、俺の思考とドンピシャな話題だ。もしもここで言葉を濁すようなら校長に直接話を聞きに――――
「いやぁ、なんだか神田とその友達がいやらしい目つきでこちらを見てくるから行きたくないとか言ってたが……」

周りから刺さる、軽蔑の視線が、痛い……しかもそれ、濡れ衣ですってば……とは言えなかった。

日々の営み

魔術実習というものは、人によっては欝になりかねないものなんじゃないかとオレは思う。それは、実習が厳しいからだとか、魔術が上手く使えないという劣等感だとか、そういうものじゃあないんだ。そんなものじゃあ断じて無い。確かにそこを辛いと感じる者だっている。だがそれ以上に――――

「『　燃やせ　焦がせ　焼き尽くせ　ここにありしは闇を照らし命をも燃やし尽くす力なり！』」

――――詠唱が痛々しくて、やってられないんじゃぁぁぁぁぁ！！

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

ここ、深根魔術高等学校も魔術学校なのだから当然のように魔術に関する勉強をする。そして、実際にちゃんと扱えるかどうかを定期的に確かめなければいけない。そのための実習なのだが……恐らく、この学校に入学した誰もが魔術の行使をするための方法に驚いただろう。なんと、ただイメージをこめて詠唱をすればいいだけとのことなのだ。扱うものによって決められた詠唱文を読みながら手の中にすべての世界を行き交う見えない力――――魔力を掴むようにして、詠唱に応じた自分が求める事象をイメージする……と言うと難しく感じるが、要は「決められた定型文を読みながら手で空気をつかむようにし、炎に関する詠唱なら爆発や火の玉をイメージす

ることでそれを起こすことが可能」ということだ。
　このように詠唱をするだけで魔術が使えるようになったのは、どんな非才や無能の身でも魔術が扱えるように、という魔女ベアトリスの救済措置のようなものだと言われている。それなしで魔術を扱える人間が少なすぎたのだ。どんなに優秀な作物も、育つ土地が少なければ意味がない。ましてや、育つかどうかもわからないようじゃあ困る、と色々な国の偉い人らから言われたベアトリスは、人間のほうではなく魔術を行うための魔力のほうにある細工を施した。

魔力に、詠唱とイメージだけで魔術の実行者の望んだ事象となるように動くという風に規定する。

　それをたった数ヶ月で魔女は行った。全ての世界に存在する見えない力に、ある一つの方向性を定めた。当然これには多くの学者も驚愕した。そんな事は有り得ない、と言ってその実績を認めない者もいたし、讃える者もいた。讃える者の一人の口から、自分の頭上を指差しながら言い放った一つの言葉は、未だにこの魔術関係の業界に根強く残っている。

「彼女はこの空に絵を描いたも同然だ！」と。

　ただ、この力にも当然悪い面がある。何か高価な触媒（しょくばい）も、特別な才能も必要ないこの力は、お手軽過ぎたのだ。そのことに気づいた世界は、すぐにこの詠唱というものの存在を特級の機密とした。秘密を一般市民にばらしたらどうなるのかはよく知らないが、世界から永久追放あたりじゃないか？　などと葉一が笑って言っていたのを思い出すが、それも合っているのではないかと思う。それほどにこの力は強力で、簡単なのだ。

話を目の前の実習に戻すと、当然のようにこの授業では多くの人

間が詠唱を使って魔術を使う練習をする。魔術学校に通う全ての生徒の内の３％ぐらいは詠唱無しで魔術を使うことも可能なようだが、使えない人間は詠唱に頼らざるを得ない。その詠唱の言葉が、とんでもなくイタイのが問題だ。この詠唱を考えたのはベアトリスだと聞かされてきたが、正直どこの中学二年生が考えた？　と言いたくなるくらいだ。なにか宗教の音楽を参考にしたとかいわれてもまったく信用できない。目の前で火系統の魔術の実習が行われているのでそれに耳を澄ましてみる。

「『　燃やせ　焦がせ　焼き尽くせ　ここにありしは闇を照らし命をも消す力なり！　』」

目の前で手を前方にかざしながら叫ぶように詠唱をする男子生徒の手元に、小さな火球が生まれる。それは手の前でしばらく熱を放っているとしぼむ様に消えていき、男子生徒は安堵したように息を吐き、その場に座った。手の下でキープができるというのも、魔術を使うものとしては努力が必要なこととして扱われる。出来なければ、そのまま飛来していってしまうからだ。なので戦闘にも使用はできるが、先ほどのような小さな火球ではほとんど威力が無いだろう。一応火なので木などに当たれば燃えてしまうが、この実習用魔術室（男女別）にはそういった事故防止のための魔力対策が施されているので問題は無い。

それで、戦闘に使うためにはより多く魔力を集め、詠唱をしなければいけない。つまり――――

「次、遠原！」

……ああ、そうか……目の前でやってたらそりゃあ次はオレの番か……。ゆっくりと立ち上がって前方に手をかざす。つまり――――

「遠原は確か先日の授業で『下位詠唱』はほとんどやりつくしたな？　よって今日は『中位詠唱』に挑戦してもらう」
「……はい。『　燃やせ　焦がせ　焼き尽くせ　ここにありしは闇を照らし　命をも消す力なり　身に宿すことはできず　また身を救うこともない！　』」

ボウッと先ほどの男子生徒の2倍くらいの大きさの火球が目の前に生まれる。ほとんど初めての体験と今まで以上の熱が身体を熱くさせ、心臓の鼓動が速くなるのを感じる。手元にキープするのは中々に難しいが、小サイズの火球よりも少し強く押さえ込める感じにすることで安定した。しぼむように火が消えていき、完全に無くなったことを確認すると担当の教師から「よし、座れ！」との言葉をもらい、床に座る。

――――つまり、より実用的にするためにはあの恥ずかしい詠唱を長くしなければいけないのだ。
詠唱には三つの段階がある。『下位詠唱』『中位詠唱』『上位詠唱』の三つだ。
下位詠唱はもっとも短く、とっさに出すことができるが出力が低い。
中位詠唱は中途半端な詠唱に中途半端な力と、文字通り真ん中くらいの魔術の発動。
上位詠唱は一番長いが、それだけ大出力で発動できる。しかし安定させることが下位、中位に比べて圧倒的に難しい。よって実習でやらされるのは多くの人間が中位詠唱までだ。上位詠唱をやることができるのは一部の優秀な生徒ぐらいと聞く。まぁ二年生、それもこのクラスに上位詠唱ができるほどに登りつめるやつはいないだろう。
ちなみに葉一は、魔術に関してだけは才能を見せている。しかも勉強のほうではなく、実践においての才だ。詠唱をしないと多くの

人間が魔術はできなかったが、それ以前に魔術を学び、使っていた人間は個人の才能で詠唱を必要とすることはなかった。
ある人いわく「魔力の存在を感じる感覚を持っていたからこそできた芸当」とのこと。彼らにとって、魔術は少し学べば感覚的に使うことができるようなものだったのだ。詠唱などという時間のかかるプロセスは必要ない。そして、葉一もそんな人間であったらしい。もっとも――――

「こら神田ぁ！　発動が早いのはいいが、調子にのって出力を上げるんじゃない！」
「す、すんません！」

それでどこまでも無茶ができるかはまったくの別問題なのだが。

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

魔術実習が終了し、そのあとの午前の間の授業が終了して昼休みとなった。朝に弁当を用意するような時間も無かったので、昼食の購買へと隣にいる葉一とともにひた走っていた。教室を出て数十秒といったところで購買の目の前に出るが……すでに体育会系どもが黒山の人だかりのごとく集まっていた。しかし、今回ここに来たのはこんなにみっちりとすし詰め状態になった場所を潜ってまで昼飯を買いに来たわけではない。
待つこと一分ほど、この分厚い人の壁の中から嬉しそうな顔をした那須野が小さな袋を抱えて出てきた。
「よう、那須野」
多分これからゆっくりとその中のパンかなにかの味を噛み締めようとしていたのであろうが、そんなことには遠慮なしに声をかける。

こちらを向いた那須野はすぐに普段の顔つきに戻り、葉一を見て不機嫌そうな顔になった。
「……なんで神田がここにいるんだ」
「いや、二人が喧嘩したみたいなことを聞いたからさ。でも悪いのはどう考えてもこいつだと思うし、本人もそれを認めてるみたいだから、謝罪の言葉くらいは聞いてやってくれよ」
「……興味無い」
「そんな事言わずにさぁー、頼むよ那須野、このとーり！！」
那須野はこちらに背を向けて自分の教室に戻ろうとしたが、オレの隣の葉一がパァンと音を立てて手を合わせながら頭を下げてるのを見て、話だけは聞く気になったのかもう一度こちらを見てきた。あまり気分はよくなさそうだったが。

「それじゃ葉一。後はお前がやれ」
オレはひとまず葉一の後ろに下がってその背中を押す。ここからは出番が無いだろう。
「那須野……スマン！　一々、いやしょっちゅうその大胆ボディに触ろうとして……深く深く反省している！　だから」
「神田、貴様は以前もそのようなことを言っていなかったか？　それで信用して欲しいとは無理が……」
この二人、前にも似たようなことしてたのかよ……これは葉一が有罪どころじゃないだろう。前科持ちに優しさなど不要。今すぐ貫かれてもおかしくないだろうに……
「違う！　今回は本気だ。俺は今回のことで自分の未熟さや愚かさを深く思い知ったんだ……だから次にこんなことは絶対に起こさない」
葉一はいつにもなく真剣な表情になった。それに対して那須野はどうも困惑している様子。今までと違うという葉一を信じていいか迷っているのだ、きっと。
「……それでも神田を信じるのは、少し……」

ダメだ。今のままでは葉一を信用するには材料が足りなさすぎる。しょうがない……助け舟でも出すか……

「那須野。それじゃあオレと約束をしよう。今から葉一があの購買にパンを買いに行く。それもお前のためにだ。お前が好きそうな品が手に入ったら許してやってくれないか？」

未だにごついやつらが群がってるところを指差しながらそう提案してみると、まだ少し渋そうな顔をしていたが、小さくコクンとうなずいてくれた。

「……しょうがない。それでいい」

「だとさ。よし、行って来い葉一」

葉一の顔を見てみれば、これでようやく希望が繋がったというのに汗が出ているようだった。夏といってもまだ六月。暑いというほどでもないのだから……冷や汗だろうか。

「あ、あれの中をかいくぐって那須野の満足するようなものを買って来いって……それはちょっと酷いんじゃないかなぁ親友ぅ！」

「なに言ってるんだ、許されるかもしれないんだからいいだろう？……ついでだが、オレの昼飯も買って来い。後でちゃんと返すから」

「お、お前まさかそれが――――」

「おっと早く行かないと良いものは残っていないぞ？　ハヤクイッテコイヨーヨウイチー」

あー、手が滑って葉一を人の波に押し込んじゃったー。でもこれでいいんだよなーきっとー。

「櫟ぃぃぃぃ！　てめぇぇぇ！」

後ろから聞こえる恨み言には、即座に耳を閉じて那須野に付いてくるように促す。付いてくる那須野のものかはわからないが、後ろからとてもクズを見るような視線で見られていたような気がした。

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

「櫟ぃ……お前ちゃんと金出せよな」
適当に自分たちの教室で待っていると、わりと早くに葉一が帰ってきた。その手にはしっかりと購買でなにかを購入してきた証があった。
「ふむ、それじゃあまずはその中身を見せてもらおうじゃないか」
「バカ言うんじゃねーよ。お前は那須野の後だ」
そう言いながら那須野に袋の中身を確認してもらっていた。那須野は吟味するように中身を見ていると、ふいに「…おっ？」というような顔をした。そして袋の中に手を入れて取り出したのは――――三角形のサンドウィッチ的な……なんだこれ？
「神田……これは」
「ん？　やっぱりクリームサンドは気に入らなかったか……？」
「……クリームサンド？」
聞いたこともない名前だ。というか、パンの中に入っているのはクリームなのか？　ここからではよく見えない。
「何だ、櫟も知らないのか？　クリームサンドっていってもこれと本来のものはまったく違ってな……」
葉一の話をまとめると、元々どこぞのご当地名物だったクリームサンドなるものの存在を偶然ここの購買パンの製作者が耳にしたが、見たこともないのでイメージだけで作り上げたものがこの学校で売られているらしい。本来のクリームサンドはコッペパンのような棒状のパンにピーナッツクリームなどをサンドするらしいが、この学校では耳をそいだ食パンを三角形に切り、その間に薄切りのみかんなどを混ぜたホイップクリームをサンドしているとのこと。なんで間違えてるのにそのままなのかは、これを気に入っている客がいるかららしいが……どうみてもこのクリームサンドはスイーツだ。しかも何か外している感じのするようなタイプの……。

「まぁ、あれだ。那須野って普段からあまりこういったデザートっぽいものとか食べないから気になってたんだよ。やっぱり女の子だし、食べはしなくても好きなんだろうかとは思っても聞く機会とかないし……それで今回買ってきてみたんだが……やっぱり嫌か？」
「……嫌じゃない」
そう言うなり、那須野はその包装を解いて勢い良くクリームサンドに噛り付いた。一口で三分の一を食べたが、とても女の子らしい食い方じゃないな……食べた後の顔を見るにとてもご満悦だったみたいだが。
「……ふふふ。こういうのも、悪くはないな」
「な、那須野。そういうのは最後のほうにだな……」
「？　何故だ。わざわざ気に入ったものを後に食べる理由がどこに」
「そういうものだから気に入るんだよ。最後に食べたほうが口の中にその味とか幸福感とかが残るだろ？」
「……それもそうだな。すまない神田。某はお前を誤解していたようだ」
手に持ったクリームサンドを置いて、那須野は神田に軽く頭を下げた。一件落着……でいいのだろうか。葉一もなんか嬉しそうな顔になってるし、これは一人仏頂面になっているのもあれだろう。よし、オレもこの空腹を埋めて幸福感を味わうか仲間になるか。

「おい葉一。パンくれ」
「……お前はどうしてそう目の前の空気をぶち壊すかねぇ。いい雰囲気だったろうが！　なぜ邪魔をする！！」
「いいじゃないか。二人が笑ってるのに、オレだけぶすっとしてたら完全にのけ者だろ。そもそもこれはお前が失敗した場合も考えての行動だったんだぞ？」
まさかこいつは気づいていなかったのだろうか……オレの深い策謀に。あの場を乗り切れずともどうにかできたというのに……はぁ、残念な男だ。

「ほぉう……いったい俺がトチったらどうするつもりだったんだよ？」
やはり、気づいていなかったか……熱血馬鹿、もしくは単純馬鹿には先を見ることなどできやしないということなのだろうか。それではこの先生きのこれまい。だからオレは不適に笑って言い放ってやる。

「とりあえずここで三人で飯を食いながらゆっくりとお前をつるし上げるつもりだった」

「……こいつは本当に友達想いだなぁ……」「……阿呆だな」
失礼な。那須野にはそういわれるつもりはない。葉一も言葉はオレを褒めているが、目はまったく持って笑っていなかった。何だっていうんだ。
「……ま、一応昼ぐらいは買ってきてやったよ。ほら」
葉一は渋々、といった風で袋の中の何かをオレに投げ渡してきた。受け取ってみれば……メロンパンか。まぁしょうがないわな。あの体育会系がごった返しているような所で、コロッケパンのようなものは中々に残りづらい。コッペパンだけとかではなかっただけマシと言えるだろう。
メロンパンに食いついてみれば、サクッというような音ともに中の柔らかい生地が舌の上で口の中に最初に感じる軽やかな硬さとともに、フワッとした感触からの甘みが広がっていく。昼なんだしガッツリ行きたいとは思うが、メロンパンでも取ってこれた葉一には感謝したい。
「葉一、よくこれを取ってこれたな？　てっきり残ってるのはハズレ……とは言いたくないが、これよりは駄目な方かと思っていたが」
ゴソゴソと自分の分のメロンパンを引っ張り出してそれに齧り付いていた葉一に聞いてみると、肩をすくめる様なリアクションでため息を吐いた。

「いやぁ～、あいつら見る目ねぇわ。残ってる中では一番状態が良さそうだったのに、他の焼きそばパンとかに群がってたからな。おかげで楽に取れたぜ」
「そうだったのか……ところで那須野は自分で何を手に入れたんだ？」
今度はその横でカレーパンを食べていた那須野に聞いてみる。オレ達が話す前にすでにあの空間で至福のような笑みを浮かべていたのだから相当すごいものを手に入れたと思うのだが……。
「……これとカツサンドと……メロンパン」
これというのはカレーパンだろうが……全員メロンパンかよ……、という空気が三人の間を漂いはじめる。なんだこのメロンパン集団は……。
「……葉一。一応聞くが他に取れそうなのは何かあったか？」
「……あんパンか、コッペパンくらいしか無かったな……」
「そうか……ならしょうがなかったんだ……お前のせいじゃない……」
そんな状況でメロンパンを買ってこれたのは僥倖だ。むしろよくやったと誉めてやりたいが……いかんせん、空気が重い……
「そ、そういえばあの購買のカツサンドって見たことないな！ちょっと見せてくれよ！」
この空気に耐えかねた葉一が、話をカツサンドのほうにシフトさせようとする。今回はいい判断だ……！
「……これだ」
そう言って見せてくれたのは、見た目は何の変哲もないカツサンドだ。しかし……今この手に持っているのが食いかけのメロンパンであることを考えるとまさしく至上の糧のような存在に見えてくる。
……一口だけでも頼んでみるか……？

「「頼む、一口だけでもそれをくれ！」」

オレと葉一、二人同時に那須野に頭を下げていた。今は腹に貯まるとかそういうんじゃなく、シンプルに甘み以外が欲しい。具体的に言えばしょっぱさだ。

「……！……」　「……！！……」

葉一と目線がぶつかり合う。二人が争うのは、目の前のカツサンドの一口。三角関係であるとかの色気はなく、実に浅ましさに溢れた戦いといえる。

「全く……貴様らはどうしてそうも独占したがるのか……」

呆れ果てたような表情をしながら、那須野はカツサンドの端をちぎって、オレ達の目の前に置いてくれた。

そこのアホと眼力の比べあいなぞしてる暇はない。それをすぐに口に運ぶと、パンに染み込んだソースの味が口内に広がった……カツなんてどこにもない切れ端もいいところである。

これはおちょくっているのかね？　と言ってやろうと那須野を見ればすでにカツサンドの半分以上は姿がなかった。

「……お前が一番独占欲が強いと思うんだがな？」

「何、これは独占ではない。ただ必要な食事を摂っているだけだ」

「ぐぬぅぅ……！」

フフン、と鼻で笑うように那須野は返してきた。確かにこっちが勝手に要求したわけだが……それでも一口ぐらいいいじゃないか！

と訴訟も辞さない覚悟で抗戦しようとしたその時、教室のドアが開いて古賀が誰かを探すように顔をのぞかせた。

「おい遠原ー……は、いたな。ちょっと来い」

「お？　何かやらかしたか？」

古賀から呼び出されたオレを、葉一はにやつきながらはやし立てる。しかし呼びつけられるようなことをした覚えもないので多分『

あれ』だろうなと思い、葉一には冷静に返事をした。
「いや、多分校長からだと思うぞ？　前のから一ヶ月は経ったぐらいだし」
「あぁそれか。んじゃ、今日か明日には用事ができるのか」
「そうだな。今日は別の用があるからいけないけど……まずは古賀に聞いてみるよ」
　早い段階で葉一は何のことか察し、プラプラとこちらに手を振ってきた。人が帰るみたいな雰囲気になって困るのでやめて欲しかったが、古賀を待たせても意味はないので無視して、話を聞きに廊下に出た。

　古賀から聞かされたのは予想通りの話だった。とにかく放課後に校長室で詳しい話を聞くようにということを聞いて、それから戻ってみれば葉一がメロンパンを二つほど口にほおばっていた。先ほどまで自分が座っていたところにあったはずのメロンパンが消えているのを見てどういうことかは察したので、葉一の頭を叩いてやる。次に腹部を狙うべく腰の位置に拳を構えると、待った！　というように葉一が手を伸ばしてきた。
「これはお前のじゃない！これは那須野がくれた――――」
「横でメロンパン食ってる那須野を見てから言えドアホ！」
我関せず、という態度で葉一を見ずにメロンパンを食べている那須野を尻目に、葉一へフックを入れる。そこでゴングの様に、昼休みの終了が近いことを告げるチャイムが鳴った。

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

「失礼します、海山（みやま）さ……校長先生」
　午後の授業が終わってから、より詳しい話を聞くために校長室で

オレを呼び出した人物――――海山奏子(みやま そうこ)に会いに来た。恩人とも言える人なので海山さんと呼びたいが本人が校長と呼べ、と言ってくるので彼女の前では仕方なく「校長」と呼んでいる。校長というにはまだ若い見た目をしているように見えるが、これでも長生きをしていると言っていたので、恐らくだがオレの予想よりは長く生きてるんだろう。スーツ姿でも女性らしいラインはまるで隠れておらず、海山さんのきつそうな性格の顔と相まってドS教師というイメージが湧いてくる。その顔を本人はコンプレックスに思っているらしく、眼鏡を掛けることでイメージを柔らかくしようとしているようだが、逆効果だった。誰も言わないので本人は気づいてないみたいだが。

「ああ、来たかい。まぁ座ってな、お茶くらいは出してやるさね」
「ありがとうございます、校長。ここに来てからもお世話になりっぱなしで……」
「気にする必要はないよ。昔っからあんたはあたしに気を使いすぎさ」

オレがこの深根魔術高等学校に通うことになったのは、この海山さんからの薦めがあったからだ。父さんが居なくなってからは父さんの弟――――叔父の遠原繁夫(しげお)さんが世話をしてくれていたが、繁夫さんに頼りっぱなしでいたくなかったのと、父さんの知り合いであったという深根さんがオレの持っていた自己複写(コピー)の力のことをどこからか知り「その力を活かすための方法を教えてやる。だからお前ら二人共うちの学校に来い」という誘いをかけられ、この学校にやってくることとなった。

もっとも、受験はちゃんと受けさせられることになっていたので海山さんが誘いをかけてきた日から必死で魔術学校に関する勉強をする羽目になったのだが。ついでになんとか入学できたときに小中同じだった葉一まで入るとは思いもしなかった。家から近い程度の理由で魔術学校に入る神経はどこかおかしいと思わざるを得ない。

「いえ、校長は色々良くしてくれますし、なにより父さんとも仲良くやっていたみたいですから……」
「仲良く……ねぇ……あいつなんかとは全くお近づきにはなりたくなかったよ。目の前の若い女ほっといてその倍は生きてる師匠にばっかり手を出して……」
「……１００より上にいったら大差はないような気が」
「……あんた、自分から生活費を稼ぐチャンスを逃したいのかい？」

ぎろり、と海山さんの目が鋭くこちらを睨みつける。もともとキツい顔つきなので、それは効果をより発揮した。蛇に睨まれた蛙のようになったオレは即座に謝るべく、頭を下げる。
「えー……と、校長。何も文句は無いので今回は見逃してください」
「その台詞、これまで何度言ってきたのさ？　ま、そんなことは気にしてもしょうがないね……早く本題に入ろうか」
何度も言った覚えなんてまるで無い、と過去から目を背けつつ、机を挟んで向かい合っているソファの片方に姿勢を正して座った。コトン、と目の前に湯飲みが置かれそこからほんのわずかに立ち昇る湯気と緑茶の匂いが鼻に入り込む。一度気を落ち着けるためにもゆっくりとそれを飲む……渋みが少し多いように感じるが、不思議と喉に滑り込むように入る、そんなお茶だった。
「いいものだろう？　これはわりと気に入ってるんだ。茶葉ならあんたの家にも少しは分け与えられるぐらいならあるんだよ？」
「気持ちは嬉しいんですけど、生憎と我が家は麦茶派でして……あ、でもみや……校長が来たときに出せるように貰っておきますね」
「じゃあ明日にでも渡してやるよ。今はもっと別の話をするために呼んだんだからね……と言っても今回も前と同じさね」
海山さんは懐に手を入れそこから取り出したものをゴトリ、と机の上に転がすように置いた。

種類も分からないような、大型の拳銃。一般人が使えば肩が外れて当然のようなサイズのものを彼女は特に何の関心も無く道具のように置いてから、シンプルに今回の用件を伝えた。

「この世界で『遊んでいる』魔王の娘を捕まえな」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4946z/

異世界の方、いらっしゃい！

2012年1月5日21時51分発行